
魔薬師の弟子

猫師匠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔薬師の弟子

【Nコード】

N8199T

【作者名】

猫師匠

【あらすじ】

薬師に拾われた記憶喪失の少女が、日々繰り広げる生暖かい日常の物語。現代、異世界、魔法でファンタジー。少しでも不思議なハートフルライフとたばたコメディ、になる予定。いろいろと詰め込み過ぎてぐだぐだになる事が眼に見えてるのに見切り発車で書き始めた作品ですので、生暖かい目で読んでください。

プロローグ

世界は一つでは無い。

それが常識として世界に受け入れられたのはA C 00年。

新世界政府連合によって全世界に発表された「異世界憲章（旧異界憲）」が発端だろう。

しかし、異世界の存在が証明されたのは、その前世紀。

一人の旅人によってその事実が明らかとなった。

その旅人は、地球人とは明らかに違う特徴を持ち、その時代では実現不可能であろう技術——後にデバイスと呼称される物——を所持していた。

旅人を保護した日本は、異世界よりもデバイスに興味を持った。

デバイスは翻訳機能や物体の圧縮解凍、その他、多くの技術を詰め込んだ汎用渡航タイプ（直訳）と呼ばれる物で、旅人の世界では比較的安価で手に入る物だと説明された。

日本政府は旅人からデバイスを一つ譲って貰う事に成功し、デバイスの解析、開発を始めた。

デバイスを旧時代の科学技術で再現することは困難を極めたが、一部の天才と奇才、変人や暇人達によって代替案や機能削減、仕様変更がされ、最初の試作品「次元航行特化型試作品43号」の開発に成功した。

最初に目指していたモノとは全く違うモノができてしまったが、そこには政治や金の話が多分に絡んでくるため、ここでは割愛させていただきます。

そして西暦最後の年。

新世界政府連合の発足と異世界憲章の発案。この二つに出来事によって世界は新たな時代を迎えた。

その後の発展は言うまでも無い、異世界は宝の宝庫と言って差し支えないだけの物資があった。しかし、それ故に危険も多く、数えきれない人々が帰らぬ人となった。

01 弟子について

おはようございます！

清々しい昼下がり、もうこんにちはですね。

という訳で、こんにちは！

はじめましての方は、はじめまして！

前世でお会いしたことがある方も、はじめまして！

わたしの名前はアリスって言います。

もちろん偽名です！

あ、別に好きで偽名使っている訳じゃないんですよ。

わたしには3年以上前の記憶が無いんです。と言っても、実際に記憶がある期間は2年間ほど、1年間は今でもよく思い出せません。聞いた話では、それはそれは酷い状態で、言葉もまともに喋れない状態だったとか。

そりゃ、名前も無くて当然ですよ。

記憶も記録も無かったわたしは、ご主人さまに拾われて文字の読

マスター

み書きやら簡単な数字を学びました。

今は、わたしを拾ってくれたご主人さま、^{マスター}薬師兼冒険者兼自由業（自由業8割）のレイ・クロフォードさまの助手兼弟子兼生徒なんてモノをやらせていただいています。

^{マスター}ご主人さまであるレイさまは、わたしの命の恩人であり、わたしの生きる目的そのものです。

そんな私は今！ とても困っています！！
なぜかって？

^{マスター}それはもうご主人さまが行方不明で！！
それは昨日の朝の事でした。

「ちよつとドラゴンの鱗仕入れてくる」

とか言い出したご主人さまが、^{マスター}出かけて行ってから早、一日とちよつと。

私は基本的に朝は弱い人種です。

そんな頭が緩い状況で、「ちよつと水汲んでくる」みたいな軽い
感じで言われたものですからわたしは、

「あ、ハイ。気を付けて行ってらっしゃいませ。お帰りは何時頃でしょう？」

とか軽く返しちゃいました。

会話の異常性に気がついたのは3度寝の後、もはやベットと枕の
誘惑に勝てないわたしは、4度寝をするかしないかの瀬戸際で、今
^{マスター}日はご主人さまが起こしに来ないなー、とか考えていた瞬間でした。

そーいえば、どらこんって……ドラゴン!?

え? は? ドラコン? いやいや、ご主人さまにゴルフの趣味
はありませんし鱗って何ですか鱗って、飛ばし屋の鱗って衣服でも
剥ぎ取って来るのでしょうか? 裸でゴルフってそれどこの――

ごほん。

そこでわたしは取り乱したりせず、冷静な対応を行いました。
迅速かつ、確実性に富んだ素晴らしい対応だったと自負しまし
う。

「寝よう」

わたしが事の重大性をハッキリと認識したのは夕方、やっと脳ミ
ソが常人並みに回転を始め、ベットの誘惑から解き放たれ、さあ!
夕食(という名の朝食)の準備を!

と、思っ材料を斬って、炒め、煮て、盛り付けて、いただきま
す、ごちそうさまでしたー。ってやった後ですよ!

何時もなら、わたしが寝る前――起きるのが遅いわたしは寝る
は早い――には帰って来る筈のご主人さまが帰って来ないではあ
りませんか!!

気が付いたものの、睡魔という名の天使には勝てず、そのまま寝
落ち。

いや、だってね。睡魔軍は一人一睡千夜の働きでもって、魂を狩
る悪魔の如くわたしの意識を刈取に来るんですから。勝てるはずが
ありません。少なくとも、わたしは負けました。

そして朝起きてみても、ご主人さまは帰っていないご様子。
マスター

これは異常事態と言っても過言では無いでしょう。
今日は朝からご主人さまの事が心配過ぎて、3度寝までしかして
いません。

とっても眠いです！

睡眠不足です！

寝て良いですか！？

だめですよ、ごめんなさい。

そしてお休みなさい————Z Z Z

01 弟子について(後書き)

作者(以下「作」) 「此処では簡単なキャラ紹介とインタビューな
んかをやっていきますよ」

作「今日はメインのヒロインで主人公っぽい、アリスさんに来てい
ただいてます。アリスさん」

アリス(以下「ア」) 「はい！」

作「いやはや、創めちゃいましたね。この作者は」

ア「死ねばいいのに★」

作「……………」

ア「まずは私のプロフィールを紹介ですか……………ふむふむ」

作「そう！ アリスは天然系元氣——」

ア「DA☆MA☆RE」

作「……………」

ア「それでは、どうぞ」

名前 アリス (現本名兼偽名)
性別 女性

年齢 16歳程度 (記憶喪失の為曖昧)

髪型 腰までの黒髪ロング ポニテ風味

タイプ 美少女系天然ボケキャラ

身長 157cm

体重 秘密

スリーサイズ (何か紅い液体の様な物で塗りつぶされている)

デバイス 首輪型(アリス専用)

魔法属性 アーティファクト

天然系元気っ子で作者としても描きやすいキャラ。

ただ、たまに暴走し過ぎて何処へ向かっていたのか、作者にも分からなくなる事が……

それでもメインで頑張ってくれるはずなので、見守ってやってください。

02 マスターについて

っは！ 寝てません。寝てませんよ。ホントホント。

困りました。ご主人さまが帰って来なかったら、わたしはどうしたらいいんでしょう。^{マスター}

^{マスター}ご主人さまが個人的に管理しているエロ本とか写真集とか雑誌とか。処分していいですかね？

燃えるゴミ、もとい、萌盛るゴミですかね。

ご主人様も盛っているお盛んな時期ですから。私にだって理解はあるつもりです。でもですね、ベッドの下とか、隠し場所的には安直過ぎて、掃除の時とか困るんですよ。捨てるべきか、見なかった事にするべきか。

まあ、捨てるんですけどね。

そこはそれ、お約束ってやつですよ。ベッドの下とか捨てて下さって頼んでいると思えません。

そうですね。今暇ですからお掃除をしましょう。

^{マスター}もちろんご主人さまのベッドの下から！

^{マスター}さあ、ご主人さまの罪を数えよう！^{ぼんのう}

早速掃除道具、もとい、ライターと火種を準備していざ出陣です！

まずはベッドの下を——ゴソゴソ——おお、ありますねえ。

お宝の山ですよ。巨乳系にロリ姉、へー、妹系まで。

これらは煩惱の如く、さぞかし燃え盛ってくれることでしょう。

「おい、何をやっている」

「それは勿論、ご主人さまの煩惱ぼんのうを捨て去ろうと——」

「その手段は？」

「それはもう、キャンプファイヤーも真青な感じで燃やしてしま…
…おう……………」

誰かの声——ご主人さまの声以外にはあり得ませんが、一縷の望みを掛けて、わたしは背後を振り返ります。

そこには、一人のイケメンが立っていました。

髪は肩辺りで切り揃えた黒、精悍な顔立ちで、身長は180センチくらい、体格は普通ですが今身に着けている半袖の下はムキムキです！ 腹筋割れてますよ。確認したんで間違いありません。

「キャンプファイヤーか、さぞかし見ものだろうな」

「ええ、それは勿論、ご主人さまの煩惱が詰まった炎ですから」

「その心は？」

「シヨウカする水が欲しい」

わたしはなんとか平静を取り繕いながら、会話を続けます。

ご主人さまの顔が怖いのはきつと気のせい。うん、大丈夫、私はまだ戦える。

「ところでアリス」

「ハイ、ナンデシヨウ」

声が裏返った気がする。

「ある薬師がドラゴンの鱗を仕入れに行ったとしよう」

「……………」（わたし無言）

「その薬師には居候が一人いる」

「どこかで聞いたような話ですね」

「まあ、聞け。薬師が品物を手に入れて帰って来てみればどうだ、そこはエロ本を漁っている居候が一人」

「へー、そんな人も居るんですねえ」

「そうだな。ここからが重要なんだが、薬師はその居候に一つ頼みごとをしていたんだよ」

「ソレハ一体なんでショウカ」

「なあに、簡単な事だ」

とても素晴らしい笑顔のご主人さま。^{マスター}

この笑顔を見れば戦争は無くなります。もちろん、独裁的な意味で。

「店番、どうした？」

「……………！！！！」

どうしよう！ 完全に忘れて、もとい、緩い頭で聞いていませんでした！

これはとても高度に洗練された言い訳が必要です。

大丈夫、わたしならできる。自分を信じて！

そして、次の瞬間には0.1秒で考え抜いた、わたしの完璧な言い訳が口から飛び出していました。

「えっと、どちら様でしょうか……………？」

「……………」^{マスター}（ご主人さまニツコリ）

あ、わたし死んだかな……………

「そうか、俺の事を覚えていないと。なら仕方ない、思いだすまで……………」

「ごめんなさいわたしが悪かったのでそれだけは、それだけは！」

マスター
ご主人さまの御仕置きモードの気配に、3歩下がって安全圏に移
動しつつ土下座を実行。

「ほう、罪を認めると」

「はい、全面的にわたしが悪かったものでこれで許してもらえれば、
わたしとしてはとても嬉しいのですが」

「これ以降俺の許可が無い限り、俺の部屋に入らないと誓うか？」

「ええ、それはもう。天地神明に誓って」

「今日の夕食は俺の好物を作るか？」

「わたしの腕によりを掛けて」

「ならさっさと作れ、俺は疲れた」

「ああ、慈悲深きわたしのご主人さまこのご恩は一生忘れる事はな
いでしょう」

「いいから行け。それと、ただいまアリス」

「お帰りなさいませ、わたしのご主人さま（マイマスター）」

その後、夕食を食べた後にキッチリと御仕置きはされました。理
不尽です！

02 マスターについて（後書き）

作「さあ、恒例のインタビュータイム！今回は新登場のマスターに来ていただきました」

マスター（以下「マ」）「何処だここは」

作「本名もマスターでいいですよね」

マ「貴様まさか!？」

作「いえ、違いますよ何言ってるんですか、そんなまさか名前考えてないなんてありませんから」

マ「ところで、俺のプロフィールなんぞ誰が得するんだ」

ア「わたしが得しま——」

マ「どっから湧いて出た!？」

作「やあ、アリスたんハアハ　ヘブツ！」

ア「こちらをご覧になりながらお待ちください！」

マ「アリスお前それは俺の———!！」

名前 レイッククロフォード（通称 マスター）
性別 男性

年齢 22歳

髪型 黒髪天パ ぼさぼさてきとー

タイプ 真面目仕事人間ツンデレ風味

身長 172cm

体重 78kg

スリーサイズ 野郎のサイズなんて（血液で解読不能）

デバイス 汎用型（市販品）

魔法属性 空間系

マスターはツンデレです。書きやすいんですが、きっとこれからもサブで頑張ってくれると思います。あくまでもサブ扱いのマスター。基本的にアリスはこのマスターからの無茶振りに振り回されまくる予定。

03 ドラゴンについて

「ところでマスター、ドラゴンの鱗は手に入ったんですか？」

御仕置きのダメージが抜けたわたしは、ご主人さまが仕入れに行っていたはずの物について聞いてみました。

「ああ、アレか。喜べ、大量だったぞ。数ヵ月は遊んでいられる」
「遊んでって、何処のダメ人間ですかご主人さま^{マスター}」
「人間、楽しんで^{ちく}楽しくが基本だぞアリス」

その返しは人間としては正しいかもしれませんが、社会人としては最低な部類ですよね。

「でも大量にって、ドラゴンが死んだ。なんて話ありましたっけ？」

ドラゴン——ちなみに龍とは別の種——は基本的に長寿だ。その寿命は千年から万年生きるとまで言われているが、それを把握した人間はいまいません。

その理由は簡単で、人間の寿命は長くても百年程度、記録を残そうにも、生まれたばかりのドラゴンは親に守られており、成長すれば何処かに巣立ってしまいます。その後は数ヵ年おきに移動を繰り返すため、発見すら困難です。しかも、個体を判別する方法は未だ発見されていないため、発信器などを取り付けて行動を監視する必要がありますがあるのですが、千年持つ様な発信器は開発されていません。なので、長くとも数年置きにつけ直す必要があります。

それを最低でも15世代に渡って行うなんて、馬鹿としか思えませんがね。

しかも、ドラゴンは年を重ねる毎に力を増して行き、死ぬ直前が一番強いと言われています。

ハッキリ言います。

それ何処の鬼畜マゾゲー。

そのドラゴンの鱗を1枚でも手に入れば、数ヵ月は遊んで暮らせる事、間違い無しです。

まあ、ドラゴンの鱗を手に入れる方法として、一番メジャーなモノが死体漁り、次が空巢^{トレジャーハント}つてところですかね。

「いや、ドラゴンが死んだなんて話は俺も聞いてないな」

「なら、空巢ですか？」

「空巢がどっちの意味かは、あえて問わんが、空巢でも無い」

「……………」

どちらでもないとしたら、どうやって手に入れて来たのでしょうか。ここら辺でドラゴンが暴れまわった、なんて話も聞いていませんし。

「ちょっと知り合いのドラゴンが脱皮の時期だな」

「ドラゴンって脱皮するんですか!？」

「驚く処はそこか……………」

だってドラゴンの脱皮ですよ!？　とっても気になるじゃないですか!

「蛇と似たようなもんだ、頭の皮が剥がれて、背中の中からニユルンと――」

「ところで知り合いつて何ですか？」

「話振って置いてそれかよ！」

「やっぱり脱皮した後の皮って、持っているとお金持ちになれるんですかね？」

「持っているより売った方が金に――」

「ドラゴンって人の姿になったり出来るんですか？」

「無視かお前！」

「ドラゴンってイタタタタタタタタタタタ」

「話を、聞け」

マスター
ご主人さまのアイアンクローによって、強制的に口を塞がれるわたし。

「分かったか？」

完全に宙に浮いているため、頷く事も出来ない。
わたしにどうしろと！？

「黙って話を聞け、それを理解したら俺の腕を二回叩け」

言われた通りマスターご主人さまの腕を右手で2回叩く。

「よろしい」

下ろして貰ったわたしは一息付く、ふう、死ぬかと思いました。

「真面目に聞け、これからの話だ」

「了解であります！」

「まずドラゴンの鱗だが——」

これがわたしの日常、変わらない、変わらない。

マスター
ご主人さまが居て、わたしが居て、偶に怒られて、褒められて――

絶対に変えてはいけない、わたしの日常。

この日常を守る為なら、わたしは悪魔にも魔王にもなりましょう。

03 ドラゴンについて（後書き）

ア「今回新キャラが出てないよ!？」

作「で？」

ア「誰の紹介すればいいんだよ!？」

作「大丈夫だ、今回はマスターにドラゴンと龍について講義をして貰おうと」

マ「俺はやらんぞ」

作「えええ!!」

ア「ならわたしがやりましょう!」

マ「頼む」

作「それでいいのかマスター!!」

ア「ドラゴンと龍について」

ドラゴンと龍は別の種族として登場させて頂きます。

ドラゴンは西洋風で人化が可能な種

龍は爬虫類に属するワイバーン科

これが一番の違いですね。

今回存在だけ出て来たマスターの知り合いは、その内ストーリーにも関係させていきたいとは思っているので、存在だけでも覚えてい

て頂けると助かります。

04 夢について

これは夢だ。

燃えている。

分かっている、何度も見た。

人が、物が——

瞳に映す全てを紅く輝かせ、炎は世界を焼き尽くす。

好きだったモノ、嫌いだったモノ。

もう思い出せない記憶の片隅。

一人佇む彼女を残し、全ては白と黒のモノトーン。

感情が追いつかない？

いや、わからない。

思考が追いつかない？

いや、わからない。

感覚が追いつかない？

いや、わからない。

これは私の記憶？ それともわたしの記録？
わからない、わからない、わからない。

彼女は一人、絶望の淵。

そして彼女は、
そしてわたしは、

何も、わからない。

これは原初の記憶。

これは始まりのモノローグ。

壊れてしまったのは世界だろうか。
狂ってしまったのは世界だろうか。

それとも私が壊れているのか。
なら私も狂ってしまおうか。

アハハ——

そうだ、そうしよう。
壊れた世界に狂った私。

この世界では、狂っていないモノのは、狂っているのだから。

さあ 始めよう。

舞台は既に、

今、目の前に——

05 朝食と新学期について

「……………ッ!」

がぼっと布団を押しつけて、わたしは起き上がりました。
今の気分を一言で表しましょう。

最悪です……………

寝汗に動悸、呼吸も落ち着きません。

内容は覚えていませんが、確実に観ていた悪夢の所為でしょう。
拾われた当初は、毎晩の様に悪夢で夜中に錯乱していたそうです
が、今では落ち着いたものです。

見ていた内容も思い出せなくなって、今では夢の恐怖よりも、起きた時の寝汗や動悸による不快感の方が圧倒的に大きくなっています。

外はまだ明るくなり切ってはいない様で、早朝と言った処でしようか。

そんな早朝の清々しい空気とは裏腹に、わたしの気分は清々しいくらいに最悪です。

流石のわたしも、2度寝するような気分では無いため、ベットから這い出して洗面所に向かいます。

とりあえずシャワーでも浴びましょうか。

洗面所に付いたわたしは、寝間着代わりに身に着けていたTシャツを脱ぎ、風呂場へのドアを開けます。

シャワーで軽く体を洗い終えたわたしは、スッキリとまでは言いませんが、気分はそれなりに、朝食の準備を始める事にしました。

今日はどうしましょう。

ご主人さまは基本的に朝は食べない派、わたしはパン食で軽く派なので、あまり量を作る必要はありません。

昨日買ってきた卵でオムレツでも作りましょう。

冷蔵庫から卵を取り出し、何となくの気分で、トマトとチーズも一緒に取り出します。

トマトとチーズを細かいサイコロ状にして溶き卵に混ぜます。

フライパンを熱し始め、6枚スライスの食パンをトースターに突っ込んでおきます。

やっぱり食パンは6枚スライスだと思っんですよ。

フライパンを温めたら油を敷いて卵とトマト、チーズが混ざったモノをドバァーっと入れちゃいます。

ジュワーっという音と共に卵が固まっていますが、焦ってはいけません。

ここで失敗でもすれば、わたしの人生の様に無残な残飯以下の残骸を晒す事になってしまいます。

フライパンを菜箸で軽く混ぜつつ、整形を行い、皿に盛りつければハイ、完成。

トーストも丁度良く出来上がっているようなので、それらを持ってダイニングへ向かいます。

マーガリンなどを冷蔵庫から取り出しつつ、最後の仕上げ。

いただきます！

やっとテンション上がって来ましたよ。

いやー、やっぱり朝は頭が回ってないですね。

元気良くマーガリンを大量に塗ったトーストに齧り付き、牛乳で流し込みます。

「うはー！ やっぱ牛乳でしょ♪」

朝は牛乳に限りますね。いやホントに！

朝食を貪っていると、ご主人さまが起きて来たようです。

「おはようございますご主人さま」
マスター

「おはようアリス、朝から元気だな」
バカっぽいな

「ご主人さまこそ、寝癖とか直した方がいいですよ」
マスター

軽口を言い合いながら、今日の予定を確認していきます。
マスター
そんな中、ご主人さまの口からトンデモナイ一言が、

「アリス、今日から新学期じゃなかったか？」

飛び出しました。

「……………え？」

「なんだそのアホの子みたいな声は」

新学期、それはまさに地獄への片道切符。

「今さら学力なんかにわたしの人生は左右されません」

「それはニートの発言だ」

「働きたくないでござる！」

「なら勉強しろ」

「学歴社会に今必要なモノは！」

「学歴だろ」

「マスターご主人さまが冷たいです……」

「マスターご主人さまが飽きれ顔でわたしの事を観ていますが関係ありません。
ん。

どうしよう、宿題をやった覚えがありません。

「飽きれてるんじゃない、憐れんでいるんだ」

「心を読まないでください」

「宿題やってないんだろう？」

「マスターエスパーですかご主人さまは」

「お前の性格と行動を良く思い返してみろ。言われなくても分かる」

い、今からやればきつと……無理ですね。

諦めてしまえば怖くない！ 人生開き直りが一番。

「アリス、もう出発しないと不味いんじゃないか？」

「え？ わたし今日は早……起き……しま……た……」

時計を確認したわたしは現状を把握します。

ヤバイです！！

朝食の残りを口に詰め込み、自室に向かい準備もそこそこに身なりを整えます。

制服に着替えました、鞆も持ちました。

宿題？ 何それ美味しいんですか？

「ご主人さま、いってきます！」
「おう、いってらっしゃい」

挨拶をしたわたしに、新聞からちよつと顔を出して応えるご主人さま。
「何処のお父さんですか、まったく。」

自転車に跨り学校までの距離、時間を頭の中で計算し、渋滞状況をデバイスで確認します。

まだ、まだ間に合います！！

そしてわたしは地獄への道を走り切り、家の時計が30分は早くなっていた事に気がつかされたのでした。

わたしの努力と労力を返せ！！

心の叫びは何処までも虚しく、心の中だけに轟きました。

05 朝食と新学期について（後書き）

作「新学期が始まりましたね」

ア「死ねばいいのに……………」

作「アリアさん、いきなり怖いと言わないで……………」

ア「新学期とかプロットの時点で弾いて置いてくださいよ」

作「いやいや、アリスのメイン活動拠点表舞台ですから」

ア「それにしても朝食が美味しそうですね」

作「アリスさん今食べたばかりでしょう!？」

ア「ああ、オムレツ……………」

作「俺は食べても美味しくああああああああああああ」

ああああああああああああああ。。。。。。。。。。

・

06 クラスメイトと転校生について

「おはよ、アリス」

「あ、アリスさん。おっはよ〜」

教室のドアを開けるとわたしに声を掛けて来た二人組。

一人は背中に大きな蝙蝠っぽい翼を持つサキュバスのサナ。無駄に大きい胸がわたしの劣等感、もとい持たざる者の心を刺激してやみません。いえ、わたしだって小さい訳では無いですよ。Bくらいあります。これで金髪の美女で成績優秀、スポーツ万能、まさに才色兼備で羨ましい限りです。

もう一人は長い銀髪を背中まで流しているセシル。背が高くスレンダーな美少女という印象ですが、見た目に反して中身はおっとり系、とっても癒されます。エルフですがツンデレ的な印象とはかけ離れた存在で、なにより性格というか性質がドえ……………いえ、何でもありません。世の中には知らない方がいい事ってあるんですよ。

「サナ、セシル、おはようございます」

挨拶もそこそこに、とりあえずは自分の席に向かいます。

朝からダッシュは勘弁してもらいたいモノですね。

席に着くと机の上にダラーっと上半身を投げ出すわたし。胸が邪魔にならないって嬉……………もとい、悲しい事実です。

「朝からお疲れね、アリス」

「アリスさんにしては珍しく早い登校時間ですから」

「家の時計が30分ほど早まっていたんですよ」

「それは御愁傷さま。いえ、今日はラッキーかも知れないわね」

「それはどういう意味ですか、サナ」

わたしの朝（最悪の目覚めでしたが）以上に貴重な物なんて（わたしの中には）ありません！

「ここまで周囲に無関心だといっそ清々しいです」

「セシルまで何ですか？ わたしは周囲に無関心なのではありません。対人関係に無頓着なだけです」

「それは分かっているんだけど、聞きたくない事実だったわ」

「転校生ですよ」

「転校生？」

それはアレか。いきなりやって来て「君を守る」とか「軍曹であります」とか言い出したり、クラス全員孕ませちゃったりするアノ、転校生？

「帰って貰いましょう」

「何処をどうしたらその発想になるのよ！」

「その返しは予想してなかったです」

「星まで帰ってくれると嬉しいのですが」

「転校初日に送り返されるなんて、不憫ですね」

「不憫とかそういうレベルでもないから！」

「転校生の性別って女ですか？」

「いえ、男だって噂だけだって、ホントに周囲に関心が無いわね」

「周りはこの噂でもちきりなのにな」

言われて周囲の雑談に耳を傾けます。

周囲は夏休み明けで勢力変化した女子のグループがいくつかと、夏休み前と変わらずの男子のグループがいくつか、その何処のグループでも噂の転校生の噂でもちきりです。

おお、聞いてみれば確かに。わたしはこれに気が付いていなかったんですか。

これは無関心と言われても仕方ないかもしれませんね。その通りですけど。

「別に転校生なんて珍しくも無いでしょう」

「いやいや、アンタに言わせれば世界の全てが珍しくも無いモノになるでしょ」

「サナ、わたしにも珍しいと思うモノくらいありますよ」

「みんな席に付け」

雑談に花を咲かせていると先生のご登場です。

わたし達の担任は日向千春、仕事の出来るビジネスライクな三十路間近の——いえ、まだ二十代前半で超絶美人！ 彼女の前では天使すら裸足で逃げ出すはずです！

べ、別に先生に睨まれたから意見変えた訳では無いですよ！ ホントホント。

だから先生、こっち見ないでください。

「アリス、ホームルームの後話がある。ちょっと私の所に来い」

ひひひひひひひひひひ！！ わたし、死にました。

「返事はどうしたアリス」

「は、い……」

声には出して無かったはずなのですが、わたしの心が読まれたとしか思えません。

「既に知っている奴もいると思うが、転校生を紹介する」

「日向先生！質問です」

「発言を許可する」

「転校生は美少女ですか!？」

どこかの男子が質問をしています。バカなんですか、自ら地雷原に――

「残念ながら、野郎だ」

「――うわあああああああああああ
ああああああ」

まあ、世界の半分は男ですからね。男子にとっては運が悪かった
としか言いようが、

「そして絶望しろ、イケメンだ」

「――神は我等を見放したあああああああああああああ
ああああああ」――

本当に運が無かったと言えませんね。

男子一同の心の叫びが教室中に轟き、教室のそこかしこに O R Z で涙を流す姿が見受けられます。

ここは何処の世紀末ですか、まったく。

「……いえ、違いますね。これといつても女子の方は反応が薄——」

は嵐の前の静けさというやつですか。

「おい、入って来い」

運命の瞬間です。

06 クラスメイトと転校生について（後書き）

ア「サナ、セシル！ 会いたかったよ！！」

サナ（以下「サ」）「嘘を付くな！」

セシル（以下「セ」）「やっと私たちの出番ですね」

作「残念なお知らせだけど、君たちの出番はもう少し後に……………」

ア「このクソ作者！ 喧嘩売ってんですよね？ ああ！？」

作「はい、誠に申し訳ないんですが……………」

サ「何？ じゃあ私たちのプロフィール考えてないの？」

セ「ああ……………放置プレイ」（ビクンビクン）

作「大丈夫！ 今即興で考えてるから、二人分！」

名前 サナ

性別 女性

年齢 17歳

髪型 金髪ツインテ

タイプ ツンデレ系 ツン多め

身長 168cm

体重 48kg

スリーサイズ ボン キュ ボン

デバイス 携帯型H235

魔法属性 闇属性

名前 セシル

性別 女性

年齢 16歳

髪型 銀髪ロングゆったり天然風味

タイプ おっとりドMギャップ風味

身長 174cm

体重 50kg

スリーサイズ スラット（チャイナが似合いそうな感じ）

デバイス ム（赤い血でこの先は解読できない）

魔法属性 水属性

二人は出て来たものの活躍してくれるのは当分先になりそうです。
なら何の為に出したんだと聞かれると……出したかったからだよ！
まあ、その内活躍して……もとい、活躍させるので期待してください。
ださい。

07 自己紹介について

運命の瞬間です。

ガラッ

教室に入ってきたのは無愛想な青年でした。

まあ、確かにイケメンでしょう。

身長もそこそこで、銀髪を肩辺りで乱雑に切り落とし、まだ着なれていない新品の制服に身を包んだ。体格は普通に見えますが、絶対に服の下はムキムキですね。ご主人さまを何時も見ている私の眼は誤魔化せませんよ！

しかし表情が無愛想です。これ以上ないくらい他人に対して興味を持っていない顔です。自分さえよければそれでいい感じがヒシヒシと伝わってきます。

「鷹津伊織だ」
たかついおり

「「……………」」（クラス一同の沈黙）

え？ それだけですか？ 見た目道理無愛想な自己紹介ですね。もっとこう、なんて言えばいいんでしょう。趣味とか転校してきた理由とか性癖とか暴露してくれてもいいと思うのですが。

「せめて趣味ぐらい言え、鷹津」

我等が担任、日向先生もそう思ったらしく助け舟——この場合

は在校生(?)に対しての——を出してくれた。

「趣味は、異界探索」

その言葉に教室が湧き上がります。

それはそうでしょう。異界探索には最低でも冒険者ライセンスの習得が必要です。

ライセンスには商業用、学生用、移動用と問題の冒険者用に大きく分けられています。中でも冒険者用のライセンスは、取得率が3割を切るなんて噂さえあるくらい難しい難関ライセンスです。わたしですか？ もちろん冒険者用を持っていますが何か？

「あゝ、まあいい。お前から、何か質問はあるか？」

クラス全体を見回して、

「3人に絞れ……」

項垂れています。

まあ、クラスの9割が手を挙げているんですから。これは当然の反応でしょう。

ちなみにわたしは少数派です。

「ならまず俺が——」

ああ、あの人は確かクラス委員の………名前が出てきません。どうでもいい名前の人だったのでしょ。佐藤とでも名付けておきます。

「次は私で良い？」

ああ、あの人はクラスのまとめ役である……名前が（中略）でしょう。佐藤とでも名付けておきます。

「なら次は俺だな！」

ああ、あの人は確かクラス一のお調子者の……（前略）でしょう。（中略）佐藤（後略）

あれ？ わたしってクラスメイトの名前、知っている人の方が少ないのでは？

「後の質問は休み時間にでもやっつけ」

先生それでいいんですか？ もっとこう……いえ、今さらでしたね。

「席は、アリスの後ろが空いているな。そこに座っておけ」
「先生！ 席替えを「却下だ」し………」

わたしの発言を最後まで聞かずに即却下するなんて、流石三十路前——

「アリス」

「すみませんでした！」

どうして、わたしの周りの大人はわたしの心を読めるのでしょうか。断固抗議したいですね。
悪魔あたりに。

鷹津……いい？ えーっと……うん、鷹津くんがわたしの後ろ

に移動して来たので軽く挨拶しておきます。

え？ 名前？ ええ、覚えていますよ。ホントホント。

「鷹津くん、わたしはアリスです。これからよろしくお願いしますね」

挨拶しつつ右手を差し出して、

「別に、お前らと仲良くつるむ気、無いから」

コ・イ・ツ・は何様のつもりですかああああああああ！！
俺様か！？ ああ！！

決めました。絶対に友達になってみせます！！

わたしはそう心に強く誓って、1時間目の準備を始めます。

「アリス、この後ちゃんと、私の所に来いよ」

忘れていましたああああああああああ！！！！

タイプ 適当単純やる時はやる

身長 172cm

体重 秘密

スリーサイズ (何か紅い物が付着している)

デバイス 高速機動型特化デバイス

魔法属性 炎属性

先生は適当に頑張ってください。ええ。

作者的には好きなキャラなんですがこれからバンバン活躍させていきたいですねw

次回！ 鷹津について こう、ご期待！！！！

08 鷹津と異世界について

日向先生の所から帰還できたわたしは、精魂尽き果てたかのように（本日二回目）机の上に上半身を預けます。

「アリスも災難ね」

「結局何の様だったんですか？」

「いつもの愚痴と、転校生の学校案内についてでした」

「転校生の学校案内って、アリスが？」

「サナ、そこで不思議そうな顔をしないでください。わたしもこの学校の生徒ですよ」

「アリスって学生だったんだね」

「セシルからそれを言われるとは思いませんでした」

地味に凹みます。

「で、噂の転校生さまは、ホームルーム終了後には速攻で教室出て行ったけど？」

「何処かへ行ってしまったのなら仕方ありません。案内は放課後にしましょう！」

「いきなり元気になったわね」

「アリスは現金です」

失礼ですね。人間、楽しんでなんぼですよ。

しかし、友達計画も進めなければなりませんね。どうしましょう。

人類友達計画。

ズバリ、その結果から言いましょう。

無視されました!!

1時間目 現国

「すみません、ここの助動詞なんですが」

「自分で考えろ」

「……………」

2時間目 数学

「ここの公式って」

「お前、バカなのか？」

「……………」

3時間目 薬学

「わたし薬学は得意なんですよ！」

「そうか」

「それだけ、ですか？」

「……………」

4時間目前、休憩時間。
今ここです。

「どうしてあの転校生はあそこまで愛想が無いんですか！　せめて建前ぐらいあってもいいでしょう！」

早くも負け戦モードです。酒持って来てください！　飲まないとやってられません。

この時、わたしの頭の中では学校案内という先生からの命令は、すっかり忘却されていました。

「荒れてるわね」

「荒れてますね」

なんですかあれ、本当に同じ人間なんでしょうか。いえ、同じとは限らないのですが。それにしたって、せめてもう少し会話というモノが、友達になるためには言語が必要です。わたしたちには知能があるのですから！

「アリス、さっさと着替えないと遅刻するわよ」

次は魔法学の実習ですので、わたしたちは現在着替え中です。サ―ビスカット？　わたしは今そんな気分ではありません。

さっさと体操服に着替えて、魔法を使用するためのデバイスを装備してしまいます。

わたしのデバイスは首輪型の特殊な物です。

ご主人さまが制作してくれた物で、音声入力に反応して発動するタイプですが、わたしの魔力は元々大き過ぎるらしいので、その制御が基本機能となっています。

わたしは軽く首輪を指でなぞり、更衣室を後にして、颯爽と魔練場に向かいます。

魔練場は縦120メートル、横80メートル高さ100メートルの広さで、魔法によって物質強化と結界効果、防音設備と初代ゴ○ラが暴れても問題ない構造になっています。でも、ミレニアムになるとちよつと抑えきれないかもしれません。

閑話休題。

そこには1学年の二クラスが集まっているため、そこそこ広いはずなのに密度では狭く感じます。数十人くらい消してしまいたいですね。

「明日は異界探索がある。その予習とこれまでの復習を行う」

集まった生徒の前には我等が担任、日向先生が説明を行っている最中です。

明日は一日使つての簡単な異界探查です。

異界には上位世界と下位世界、並行世界の3種類に大別されますが、下位世界については、そこまで注意する必要はありません。

下位世界では、いわゆるチートが発動されます。世界によって違います、異能力が使える世界では最高ランク以上の異能が付加されたりします。その分、自身に対しての効果が減ったりしますが、滅多な事では掠り傷すら負わないので問題ありません。

そして気を付けなければならない上位世界。

上位世界では、わたしたちはアリ同然です。ちよつと肩が触れ合っただけなのに、ヒットポイントゼロで死亡なんて事が起こりえますから。それでも、自身に対しての効果は劇的です。その世界では

ただのポーションでも、わたし達にとってはエリクサー並みの効力になったりしますからね。

劇的すぎて、不老不死の秘薬にもなったりしますが……

そして一番気を付けなければならないのが並行世界。

一見わたしたちと同ランクに思えますが、異世界のランクは生物の強さや科学の発展状況だけが対象ではありません。思想や文学、その他多くの要素によって決まっているため、それこそ行ってみなければ分からない状況です。

並行世界では、過酷な状況でも自身の能力のみで生き残らなくてはなりません。さらに、異世界のランクは不変ではありませんから、何時の間にか並行世界が上位世界や下位世界に変わっていたりと、危険はいっぱいです。

08 鷹津と異世界について（後書き）

鷹津（以下「鷹」）「……俺の出番は？」

作「アンタ使いにくいんだよ！」

ア「作者良くやりました。GJ！初めて誉めてもいいと思いましたね」

作「そんなに褒めるなよ。照れるぜ」

鷹「俺の出番は！？」

ア「アンタの活躍なんて見ても楽しくないですよ！」

作「そーだそーだ！」

鷹「あんたら最低だな！」

ア「そんな事言う奴のプロフィールはこうです！」

作「いいぞアリス、もっとやれ！」

名前 鷹津 たかつ 伊織 いおり

性別 男性

年齢 17歳

髪型 銀髪ボサボサショートカット風味

タイプ 無口クール（デレは無し）

身長 178cm

体重 68kg

スリーサイズ ムキムキ

デバイス 簡易型 特小型 汎用型 (複数所持)

魔法属性 切断属性

鷹津は使いにくいのでがんばって書いてます。

無口でクール。動かない事文字の如し。まったく動いてくれません。
アリスとは対照的なキャラで恋愛関係になるかは未定。

09 魔法について

「まずは二人一組で魔法の実践だ。あくまでも練習だという事を忘れるなよ」

二人一組ですか。わたしたちはいつも3人でつるんでいるんですが、一人余ってしまいますね。どうしましょう。

「アリス、鷹津と組んでやれ」

「日向先生！ わたしはサナと」「セシル、一緒に頑張りましょうね」

サナああああああああああああああああああああ

裏切られました……。○

セシル、その同情的な目はやめて下さい。とても、凹みます。ぐすつ——泣いてませんよ。ホントホント。

「すまん、鷹津と組めるような奴は、うちのクラスだとアリスぐらいしか居なくてな」

「日向先生、それはどういう意味ですか？」

「鷹津の精神力はアリスの魔力とほぼ同等値でな。まあ、がんばれ」

ほう、それは珍しいですね。

異世界人と地球人の大きな違いは魔力の有無に在ります。

異世界人は精神力——つまり生命力の残りカスを魔力に変換することができません。地球では分かり易く魔力と呼称してはいますが、魔力は言ってしまうえば、生命力の残りカスから不純物を取り除いた

生命力の基となる元素と言えるでしょう。

今のデバイスの基本機能は転移先の登録と魔法術式の構築、そして、魔力への変換です。

生命力を魔力に変換できない地球人——変換できる人もいるらしい——はデバイスに精神力を注ぎ込んで、魔力を作りだし、それを魔法に転化させています。

使い過ぎれば早死に確定ですね。

わたしは精神力を魔力に転化させる事ができてしまうので、珍しい地球人なのか、それとも普通(?)の異世界人なのか、まあ、気にしていても仕方がないですよね！

話が逸れました。

この精神力から魔力への転化時に、その人によって変化させやすい属性なる物が存在しています。

気性の荒い人ならば炎属性、巫女さんの様な人なら光属性みたいな感じで理解してくればいいと思います！ え？ 分かりにくいですか？ 別にいいじゃないですか！

それが俗に言う属性魔法です。

わたしの場合はアーティファクトタイプと珍しい物で——つと、これは蛇足ですね。

「それで、肝心の鷹津くんは何処でしょうか？」

「自分で探せ」

この三十路教師い……………

探しますよ、探せばいいんでしょう。だからそんなに睨まないでください。

「鷹津くん、どこですか」

仕方がないので探します。

鷹津くんは魔練場の端っこの方で、全体を眺めるように視線を動かしていました。

「何をやっているのですか？」

「人間観察」

「悪趣味ですね」

「……………」

あら、無言ですか。

ちよつとストレート過ぎたかもしれません。

「人格が歪んでいるとは思えない趣味ですね！」

「お前は俺を貶しているのか？」

あれ、おかしいですね？　しっかりとフォローしたつもりなのですが。

「鷹津くんの人格なんてどうでもいいんですが、さっさと練習を始めませんか？」

「お前、結構いい性格してるよな」

「え！？　どうして分かったんですか？　わたし良い性格しているって、よく言われるんですよ！」

「それは……いや、俺が悪かった」

どうしてそこで、哀れな小動物を観る様になるんですか？

ああ、そんな事より早く練習を始めないと、日向先生がこっちを睨んでいます。

「ああ！？ てめえ、それどういう意味だよ！！」

そのわたしの努力を、魔練場に突如鳴り響いた怒鳴り声が無駄にしました。

わたしはデバイスに送り始めていた魔力を暴走させないようにするため、細心の注意を払いつつコントロールします。

何処のバカですか！ 魔法ぶっ放しますよ！！

「アンタの魔法は、見てくれだけのゴミだって言ったのよ」

サナああああああああああ！！！！

新学期早々に問題起こさないでくださいよ！

そこでは男子S——名前？ 知りません——とサナがいがみ合っていました。

「デメエ！ このクソアマあ、大人しくしてりゃあ、調子に乗りやがって」

「調子に乗っているのは貴方でしょう？ 何、死にたいの？」

一触即発の空気に、魔練場に居た生徒全員の視線が、そこに集まっています。

訂正、日向先生だけそっちを見ていませんでした。

何とかして下さいよ、先生！！

「俺の魔法を味わってから同じ事が言えたら誉めてやるよ！
蛇炎じゃえん」

男子の声と同時にデバイスが精神力を魔力に変換、炎の蛇がそこに現れました。

炎の蛇は滑るようにサナに向かって、

「消えなさい」

道半ばで、サナの一言によって掻き消されました。

蛇さん、来世ではきつと……

「はっ！ この程度で魔法？ 笑わせてくれるじゃない」

「——っ！ 今度は本気だ！！」

「今度？ 次があるなんて、幸せな事ね」

「焰りゅ……っ……ああああああああ」

まさか！？ 暴走！！

09 魔法について（後書き）

作「新キャラもそろそろ打ち止め、今回はインタビュー行ってみよう」

ア「わーぱちぱちぱちー」

作「今回は第一回、アリスさんに聞いてみよう」

ア「へ？」

作「やっぱりメインヒロインですからね」

ア「いえ、わたしはメインヒロインですよ」

作「えー、やっとアリスのキャラが固定されてきて、作者としても書きやすくなってきたんですが。なんと！ そんなアリスさんに質問の使い方が！」

ア「アンタの作品まだ評価されてないでしょう！ レビューも感想も0だって知ってるんですよ！！」

作「火星在住の「R18ネコ」さんから。魔薬いつも楽しみにしています。あ、ありがとうございます！」

ア「火星在住って！？ 地球人ですらない！？」

作「えー、アリスさんはいつも活発なイメージなんですが、好きなスポーツを教えてください。あと、そのスポーツをしている際に胸が

邪魔になったりはしませんか？」

ア「えーっと、好きなスポーツはって、完璧に後半セクハラでしよう！！」

作「ほら、早く答えてあげて」

ア「好きなスポーツは、陸上競技全般で、胸は……邪魔になりませんよ！！ これでいいですか！？ 満足ですか！？ あああ！！？」

作「ではまた次回！」（即逃げの作者）

ガッ（アリスが作者を捕まえる音）

———（自主規制）———

10 暴走について

とかネタやっている場合じゃありません！

デバイスが処理速度を超えて暴走しています。あれでは魔法がコントロールを離れて爆散してもおかしくない状態です。不幸中の幸いと言えなくもありませんが、学校のデバイスが安物で助かりました。学校のデバイスなら安全装置が――

「そう言えばアイツのデバイスって自前じゃなかったか？」
「やばくね？」

近くの男子たちの眩きによって危険度が跳ね上がりましたよ！？
サナと言い合いをしていた男子の魔法が姿を表します。それは、
炎の龍と言っても差支えない姿をしていました。ちなみに、アジア
圏の方です。龍玉に出てくるアレです。

しかし、龍はあろうことか男子生徒が目標のサナではなく、何を
間違えたのか反対側に居たセシルに向かって行きました。

狙いが逸れ過ぎでしょう！？ どうしてそっちに！！

「『アリス』 限定解除！ 『マーチヘアー発狂兎』、 『トランプ使い捨ての数字』」

この距離から走ったのでは間に合わないと判断したわたしは、加
速と楯の魔法を同時に展開、セシルに向かって一直線です。

発声によって無理やり起動した魔法に、体内の魔力が吸い取られ
急激に減少したため軽い眩暈を感じつつも、炎の龍とセシルの間に

なんとか滑り込みました。

ゴウツ！！

そして、迫りくる炎はわたしが展開した楯と拮抗——したかに見えたが、一瞬で霧散。

どうやら先生辺りが魔法で相殺したようです。何というか、三十路前でも教師といった処でしょうか。

わたしは展開していた魔法を解除しま——

——ゆらり——

目の前で火の粉が揺らめく。

燃えている。

世界が燃えている。

違う！

瞬間、酷い倦怠感の様なモノが、わたしに襲いかかって来ました。

揺れる——世界が？——ゆれる——私が？——ユレル——

違う！

私は——

違う違う違う！

貴方は――

違う違う違う違う――アハハ――違う違う違う違う違う違う違う
違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う
違う違う違う――アハはハ――う違う違う違う違う――あはハは
は――違う違う違う違う違う――！！！！！！

「――――ッ！！」

そででも、意地でなんとか踏みとどまりました。

え？ 私立っていますよね？

ほら、大丈夫、わたしは大丈夫です。

なんともない、わたしは此処に立っています（私が立っているのは何処？）。大丈夫、わたしは此処に居ます（私が居るのは何処？）。

「――――？」

「――！！――！！」

ああ、サナにセシル。そんなに心配そうな顔しなくても、大丈夫ですよ。ほら、何ともありませんから。

「――！！――！！」

だから、わたしは大丈夫――

ぶ、と言おうとして、いえ、実際に声に出したつもりだったのですが。まったく口が動いていない事に気が付きます。

これは、マズ――

「ちょっと……保健、室にっ！」

何とかそれだけ言って、わたしは魔練場を抜け出しました。

何処をどう走ったのか、わたしは気が付くと屋上に居ました。

幻視。

炎が揺らめく。

――ねえ、早く夢から覚めましょう。――

「煩いですよ！ 黙っていてください！」

不意に聞こえて来た声に怒鳴り返すわたし。

いえ、違いました。

これは幻聴、幻聴です！

わたしは何も聞いていません。何も聞こえていません。

――ふふふ、夢を見ているのは貴方かしら？それとも私？――

これが現実です。頭湧いてるんじゃないですか？

――兎を追って夢の中、私はいつも鏡の向こう――

わたしは夢なんて見ていません！

——全て壊して、毀して、請わして、恋わす——

黙れ黙れ黙れ！

——ヒトはコワス、モノでしょう？——

黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ！！！！！

「黙れ！」

わたしには、力の限り叫ぶ事しかできません。

10 暴走について（後書き）

作「いやあ、アリスさん大変でしたね」

ア「アははははハハハはハハハハハハはははは」

作「ア……アリスさん？」

ア「幻聴なんてわたしの頭をふっ飛ばして聞こえなくしてやりますよー！！」

作「ストップストップストオオオオオオオッ！！！！」

ア「放せ離せ話せ！！」

作「黙ってないで鷹津も手伝え！！」

鷹「何故俺が」

ア「ヤハハははハシヤはハハハハハははははは」

作「アリスさんが壊れたああああああ」

鷹「フッ」

ア「ハハハハハハグエッ」

作「あれ？」

ア「……………」(死————ん)

作「死んでないよね!?! 凄いぐったりしてるんだけど!?!」

鷹「運が良ければ眼が覚める」

作「運が良ければって!?! 運が良ければって何!?!」

鷹「黙れ」

作「ぐえっ」

(静まり返る周辺)

11 わたしについて

「おい」

「!？」

——あら、良い処だったのに——

振り返れば、そこには噂の転校生。

「何かご用でしょうか？」

今はちよつと余裕が無いんです。

今更わたしに構わないで欲しいんですけど。

——なら、私の相手をして貰えないかしら？——

「いや、あれだけの魔法を使った後だ。体調を崩して倒れるんじゃないかと不安だな」

「それは残念でした。わたしはこの通り元気です」

別に魔力切れでは無いですし、大丈夫に決まっています。
そして幻聴、いい加減に黙りなさい。

——あら、そんなに悲しいこと言わないで——

「本当にその言葉通りだったらいんだがな」

「何を言っているんですか？ 見て分からないな——」
「その無表情の何処が大丈夫なんだ？」

ああ、失敗しました。

何時も通りのつもりだったのですが。

——残念。面白い夢だったのに——

「わたしにかまわないでください」

今の自分が無表情なのは理解しました。

なら、もう猫を被り続ける意味ありません。

——私もそろそろ、限界みたいね。次は、夢の中で会いましょう

「この事は口外。ああ、どうせまだ友達も出来てないですよね」

どうせバレたんです。このまま口封……もとい、ちょっとしたお願いをしても問題ないはずです。

「ここでは何もありませんでした。ここには誰もいませんでした。分かりましたか？ それとこれは、お願いじゃないですよ？ 命令です」

「二重人格か？」

「いいえ、ちょっと面の皮が厚いだけです」

「それにしては簡単に剥がれたように思えるが」

「火はトラウマになってまして、もう大丈夫だとは思っていたのですが、少し失敗しただけです」

本当に、あの程度なら大丈夫だと思っていたのですが。
そうですね、そろそろ大丈夫でしょう。

.....

瞼を閉じて深呼吸。さあ、もう大丈夫。
心機一転、何時ものわたしに戻ります。

「あれ!？ 鷹津くんこんな所で何やってるんですか!？」
「.....は？」

わあ！ 鷹津くんの驚いた顔です！ 予想以上の間抜け顔にちよ
っと笑いそうです。

「今は授業中ですよ？ 早く教室に戻りましょう！」
「おい.....」

「鷹津くん？ 何か言いたい事でもあるんですか、面白い顔をして
ますよ？」

ああ、そうですね。今の内に説明してしましましょう。

「鷹津くん。ちょっとした昔話です」
「は？」

まあ、そうですよね。いきなり昔話とか言われても意味不明だと
思いますが、わたしは構わず続けます。

「わたしには3年以上前の記憶がありません」
「それ、は.....？」

「いきなり何言ってるんだお前は的な顔は、やめて頂けませんか？」

それに、この事は学年では割と有名な事ですよ。今さら知っている人が一人増えた処で、事実も噂も変わりありませんから」

実際、わたしの過去についてはそこそこに有名です。
なぜかって？

自己紹介の時に自らバラしましたから！

コラそこ！ お前バカなんじゃないの？ とか思いましたね！
その通りです！ いいですよ、もっと崇めなさい。

「記憶喪失で記録喪失だったわたしに、名前と帰る場所を与えてくれた人がいます」

本当に感謝しています。そしてそれ以上に、わたしはご主人さまマスターに謝らなければなりません。

「拾われた当初は、何も分からなかったんです。文字通り、何も分かりませんでした」

その頃は喜怒哀楽、知識、常識、自分、その他多くの全ての事が分からない状態だったんです。

「その人には怨まれて当然の状況で拾われたはずなのに、それでもわたしを捨てずに3年間育ててくれました」

3年間で、その3年間でわたしの全てです。どんなに短くても、わたしの一生です。

感情だって未だによく分かりません。今のわたしは乏しい感情を、3年間で覚えた膨大な知識でカバーして、3年間で培った全ての経験でカバーして、大げさに表現しているにすぎません。

「その人に伝えたい事があって、わたしは感情というモノが欲しいんです」

そう、全てを伝えるために。

そして、わたしの事を断罪してもらうために。

「だって、感情の無い上辺だけの言葉なんて、誰も欲しくはないでしょう？」

わたしの話を聞いた鷹津くんは、何とも言えない微妙な表情をしています。

そこは、笑ってくれればいいのに。

「一つ、聞いても良いか」

「わたしに答えられる範囲であればいいですよ」

「どうして、笑っていられるんだ？」

鷹津くんはバカなのでしょうか？ 全く、理解しがたい質問です。だからわたしは、

「不幸な人が笑っていちやいけませんか？」

飛びっきりの笑顔で答えてやりました。

造り笑顔だってバレていても、構わないくらいの飛びっきりの笑顔で！

11 わたしについて（後書き）

作「シリアスは疲れたよ」

ア「何故ですか！　せっかくのわたしの見せ場なのに！」

作「いや、だってねえ」

ア「濡れ場ですよ！　ティッシュが何枚あっても足りませんよ！」

作「鷹津、感想は？」

鷹「意味不」

ア「ヒドイ！　せっかく頑張ったのにい」

鷹「嘘泣きはやめろ」

ア「ぐすつ……泣いてませんよ。ホントホント」

作「鷹津え……」

鷹「え、俺の所為か！？」

作「実は」

鷹「なんだよ」

作「これ一発書き、編集無しの毎回勢いで書いてるんだけど」

ア「それがどうかしたんですか？　グスっ」

作「落とし所が見つからない」

ア&鷹「もう消えろよ！」

12 仕事について

「^{マスター}ご主人さま、今帰りましたよ」

午後の授業を無難にこなして、わたしは^{マスター}ご主人さまとの愛の巣に帰って来ました。

愛の巣だなんてそんな、照れますね。

「^{マスター}おや、ご主人さまは何処でしょう。

何時もならすぐに帰って来る「おかえり」の一言が聞こえません。

少し家の中を散策しても、^{マスター}ご主人さまの姿はありませんでした。という事は、お店の方でしょうか？ 珍しいですね。

「^{マスター}お店の方に顔を出しますと、そこにはご主人さまともう一人、お客様でしょうか？ こんな店に来て下さるなんて、10回くらいなら感謝しても良いかもしれせん。」

「もうちょっと安くならんのか？」

「いやいや、それでも安くしていますので」

「^{マスター}ご主人さまが仕事をしています！」

明日には世界が減びてしますね。さようなら、短かったわたしの青春。

「^{マスター}お、アリス。帰って来たなら手伝え。仕事だ」

「^{マスター}ご主人さま、短い付き合いでしたが、ありがとうございました」

「……………何を言っているんだお前は」

「だって、ご主人さまが仕事をしているなんて……世界の終わりです！」

「世界より金だ、いいから手伝え」

「客の前でその態度は……いや、分かってはいたんだがな」

おや、よく見てみますと、お客さんはわたしの学校で教頭なんぞで役職についている兼田先生ではありませんか。

「教頭先生、こんな所に何の用でしょうか？　まさか、わたし退学ですか……………」

「そのまさかなんだよ」

「何が原因だったんでしょう。やっぱり教頭先生の事をハゲだって噂していたのが」

「その噂の事は後で詳しく聞くとして、退学は冗談だ」

「アリス、後で話があるからな」

完璧に失言だったようです。

「ところで、本当にこんな店に何の用ですか？」

「明日、君たちは初めての異界探索だろう？　それ用に回復薬を大量に、安価で手に入る店を探していてね」

「そうでしたか、それならこの店で間違いありませんね」

マスター　まやくし
ご主人さまは魔薬師の免許を持っています。

魔薬師は魔法を使つての薬の調合を行っています。それに使う材料は高価ですので、その分、価格も高くなってしまうがちですが、ご主人さまは材料を自身で調達していますので、安く販売が行えます。

ちなみに、それを利用して街では大量の薬剤を注文された場合は、
ご主人さまの所を紹介するように街ぐるみで協力体制を………お
つと、これは秘密でしたね。

「これ以上の譲歩は、店側としても難しいんだが」

「わかった。それでも、そこら辺で買うよりは安いしな」

そう言って教頭先生は回復薬と、その他数種類の魔法薬を購入して
いきました。

量が多いので後で納品に行く事になりそうです。

それはそれとして、

「ご主人さま、今日は宴会ですね！」

「ああ、準備を始めろ」

教頭先生が購入していった品々の価格は適正価格よりも少し低め
ですが、ご主人さまが制作時に出した金額の約5倍の価格です。

なぜ、こんな価格で販売が可能なのかといいますと、ご主人さま
独自の調合でしたり、自身で入手して来たタダ同然の材料を使用し
ているからなのです！

ちなみに無認可。これは秘密です。効力が市販のモノと同等で、
副作用さえなければいいじゃないですか。

こうやって儲けた金銭は、街の居酒屋で魔薬師仲間や冒険者と一
緒に飲むことで還元しています。

魔薬師達はご主人さまの店を紹介することで、タダで飲み食いが
でき、居酒屋はそれで儲かります。冒険者たちはそのお零れに預か
って飲み食いが出来ます。

まさに一石三鳥くらいのお得です。

「魔薬の制作とかストックは大丈夫ですか？」

「ああ、丁度在庫分で足りそうだ。足りない分は作るとして、後で納品に向かわんとな」

「仕事はどれ位で終わりそうですか？ 飲み仲間たちに声をかけなくてはいけませんので」

「そうだな、8時には終わるだろう。飲みは9時からでいいんじゃないか？」

「わかりました。それでは行ってきます！」

宴会まで後2時間ほどでしょうか。それなら余裕で間に合いそうですね。

わたしはその情報を伝えるために、街へと駆け出しました。

12 仕事について（後書き）

作「俺も飲みたい……………」

ア「混ざればいいじゃないですか」

作「ヒトと飲むの、メンドクサイ」

ア「ダメ人間」

作「ダメ人間でいいから、一章遊んで暮らしたい」

ア「アンタ一章分遊んだら何故かチョココロネ食ってた失敗を忘れたのか!？」

作「いやー、最初は真面目に異界探索してたはずなのにな（笑）」

ア「せめてメロンパン持ってこい!」

作「ツツコミどころはそこなのか!？」

13 納品と泥酔について

疲れました…………

どうして魔薬師たちは電話というモノを嫌うのでしょうか。

マスター
「ご主人さまを含め、魔薬師たちは、携帯電話は元より固定式の電話さえ使用したがりません。」

なんでも、魔薬の調合時に電話が鳴るのが我慢できないのだとか。なら電源気を切っておけばいいじゃないですか、とか思ったりもするのですが。

マスター
「魔薬師たちはそもそも変わり者が多いのですよ。ご主人さまも含め根は良い人たちなのですが、そもそも世捨て人のような人たちです。そこで、そこは気にしても仕方がないかもしれません。」

マスター
「ご主人さま、仕事は終わりましたか？」
「おう、今から納品だ」

マスター
「7時過ぎにわたしが戻って来たところ、ご主人さまも仕事が終わっていたようです。」

「納品に行くぞ、手伝え」
マイマスター
「はい、わたしのご主人さま」

車に魔薬を積み込んで、さあ学園に出発です。
車は使うのに、電話は使用しません。基準がまったく分かりませ

ん。

車は淀みなく進み、30分ほどで学園に到着しました。

「商品のお届けです！ 判子かサインお願いします！」

「あらあら、アリスちゃんじゃないの」

「あ、事務員のお姉さん！ 最近休んでいたみたいですけど、大丈夫ですか？」

「いやねえ、親戚の葬儀でちょっと休んだだけよ。私の体調が悪かった訳じゃないわ」

「ああ、そうだったんですか」

「えーっと、サインでも大丈夫なのよね」

「はい、このこと、ここをお願いします！」

事務員さんとは顔なじみなのですが、ここ最近は見かけていなかったの、密かに心配していたんですよ。でも、病気とかじゃなくて本当に良かったです。

「アリスちゃんは今日も元気そうで、私も嬉しいわ」

「ありがとうございます！ 大丈夫ですよ、わたしは元気だけが取り柄ですから！」

『アリス！ 納品終わったか！？』

マスター
ご主人さまの呼び声が聞こえてきました。

「あ、これから飲み会があるんですが、お姉さんも来ますか？」

「ああ、最近私、仕事休んでいたでしょ？ その所為で仕事が出来ているのよ」

「では、またの機会にお誘いさせていただきます」

「ありがとう、そうしてもらえると嬉しいわ」

「ご利用ありがとうございます！　またのご利用をお待ちしております」

そう言って、わたしはマスターご主人さまの待つ車へと小走りで向かいます。

マスター「ご主人さまお待たせしました」

「いいから行くぞ、久しぶりの飲み会だ」

マスターご主人さまが運転する車は、飲み場へ向かいます！

さあ、夜は飲み放題です！　これは飲まなければ損としか言いようがありません。

飲みすぎました……おええ……吐いてはいませんよ、ホントホント。

飲み会は大いに盛り上がりましたよ。

それはもうドンチャン騒ぎで、2次会、3次会、果ては5次会まで行いまして、今は早朝5時です。

完全に徹夜で飲んでいました。

世界が回ります。マスターグルグルです。魔法陣です。

車を運転するマスターご主人さまは一滴たりとも酒を飲んでいません。

飲酒運転は犯罪ですからね。

マスターそもそも、わたしはご主人さまが飲んでいる処を見た事が無いように思います。まあ、3年ほどの付き合いですから、それも当た

り前かもしれません。

あ、わたしもお酒は飲んでいませんよ、ホントホント。

マスター
「ご主人さま」

「どうしたアリス？」

わたしの声に、^{マスター}ご主人さまが後部座席で寝ているわたしを振り返ります。

ああ、^{マイマスター}わたしのご主人さま安全運転の為に前を見て運転してください。

しかし、それ以上に衝撃の事実をわたしは^{マスター}ご主人さまに伝えなくてはいいけません。

「吐きます」

「待て待て待て！！！」

ついに限界突破したわたしは、^{マスター}ご主人さまにその事実を伝えると同時に、口元を手で押さえます。

車、急停車。

衝撃。

胃袋が軽く^{オートリバース}自動再生。

後部座席から引っ張り出されるわたし。

「おええ————」

そしてわたしは、道端でorz状態。

^{マスター}「ご主人さま、すいません……………」

「謝るぐらいなら飲むな、吐くな」

本当にすいません。と心の中で懺悔しておきます。
これから言う事は、^{マスター}ご主人さまが絶対に言って欲しくないと思っ
ていることだと、思いますから。

^{マスター}「ご主人さま」

「何だ？」

「何時も迷惑かけて、すいません」

「謝るな」

「何時も足手まといで、すいません」

「だから、謝るなよ」

「わたし、重荷ですよ、邪魔ですよ。ご主人さまはわたしの事、
嫌いですよね………」

「そんな事ねーよ」

^{マスター}「ご主人さまは、本当に優しいですね。」

だから、本当に、申し訳がありません。

^{マスター}「ご主人さまはわたしの事が嫌いなのは、分かっていますから。大
嫌いですよね、殺したいほど、憎んでいますよね」

「……………」

「わたし、面倒ですよ、分かっていますから。嫌になったら、捨
てて下さい」

「まだ捨てないから安心しろ」

^{マスター}「ご主人さま……………」

「何だ？」

「……………うっ……………」

続けようとした言葉は、幸か不幸か込上げて来た吐き気に抗えな
かったわたしの喉で、酸っぱい物に代わって出てきました。

「おうえ——」

酸っぱい物は私の栄養にはなりませんでしたが、きっと植物の栄養となってくれると願っています。

貴方達は無駄ではなかったんです。ただ、人体に吸収されなかったからです。

「もう大丈夫だと思います。帰りましょう」
「本当か？」

マスター
ご主人さまが疑わしげにわたしを見降ろします。

「期待に応えられなくて申し訳ないのですが。もう、出せるモノが無いんです」

「なら、安心……か？」

「それに、今日も授業がありますから。早く帰りませんと、遅刻してしまいます」

「お前はその状態で授業受ける気なのか!？」

「当たり前じゃないですか、わたしは優等生ですよ?」

「胃の中身をぶちまけながら言われても説得力が無い!」

大丈夫です。魔薬と魔法と牛乳さえあれば、1時間で回復して見せますから。

「まあいい、大丈夫ならさっさと車に戻れ」

「助手席に座っても良いですか？」

「……………後部座席で寝てろ」

残念です。

「あからさまに項垂れるな。寝てろ酔っぱらい」

ふらつく体を何とか立て直し、ご主人さまの肩を借りて後部座席
まで向かいます。

「申し訳ありません、すいま……せん、……ごめんな……さい、
ごめん……なさ……い……ごめ……んなさ……い……」

肩を借りている間、ただ謝り続けたわたしを、ご主人さまは何も
言わずに後部座席へと投げ入れました。

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい――

何度も、何度でも、わたしは懺悔を続けるしかありません。

ご主人さまはわたし^{マスター}がした事を許してはくれないでしょう。

そもそも、ご主人さまはわたし^{マスター}が知っている事を知らないのです
から、謝られる理由も分からないかもしれません。

それでもわたしは、謝るしか――

その後、車の中で意識を落としたわたしが起きたのは、遅刻ギリ
ギリの7時半頃でした。

13 納品と泥酔について（後書き）

作「アリス、どうしよう」

ア「どうしたんですか、珍しく深刻そうな顔をして。珍し過ぎて明日はきっと世界が減びますね」

作「そこまで珍しくないと思いたいが……世界は滅びるかも知れん」

ア「な、なんですってー！？　って、世界がそう簡単に滅びて溜まりますか！」

作「いや、ストックが切れた」

ア「バカですか貴方は！！」

作「いやでも明日はきっと1万文字くらい書ける気がする」

ア「憶測はやめて下さい！」

作「飲酒は二十歳から！　未成年は飲んじゃ駄目だぞ！」

ア「話を逸らすな！！」

作「頑張って書くから許して下さい」（orz）

ア「言う前に書け！　行動で示せ！！」

作「はい……」

14 二日、もとい体調不良について

「頭が痛いです……………」

二日酔いではありませんよ。お酒なんて一滴も飲んでいないんですから。ホントホント。

それはさておき、わたしは昨日どうやって家に帰ったんですしたっけ？ 全く記憶が残っていません。

確か、あれは5軒目のラーメンを食べた後……………トイレに行つてからどうしたんですしたっけ？ どうしましょう。ご主人さまに何か迷惑をかけた気も——あ、頭が痛いです。

「どうしたのアリス、顔が悪いわよ？」

「サナ、わたしの顔の造形が悪いのは今に始まった事ではありませんよ」

「これは、重症ですね」

「本当にどうしたの？ 体調悪いなら保健室にでも行く？」

サナが本当に心配そうな顔で、机に突っ伏すわたしの顔を覗き込んでいます。

「大丈夫です。ちょっと二日……………風邪気味なだけですから」

「まさか、また徹夜で飲んで居たんじゃないでしょうね」

「大口の依頼でもあったんですかね」

「何を言っているのですか、わたしは未成年ですよ？」

「説得力どころか論点がズレてまいすね」

ああ、これは少しヤバそうですね。最終手段を使うとしましょうか。

わたしは鞆の中をゴソゴソと漁り、目的のブツを取り出しました。

「アリス、まさか貴方……………」

「ちょっとだけ、ちょっとだけですから」

わたしが取り出したのは円状の黒い首輪です。

そう、デバイスですよ。

それを、首に取り付け、魔力を流しつつ起動させます。

「『アリス』限定解除、王様^{キング}の特権」

魔法を発動するとわたしの体からアルコール……………もとい毒素が抜けて行くのが分かります。

「つくづく便利だと思うわ。アーティファクトだっけ？」

「そーでも無いんですよ。いろいろと制約やら使えないモノも有りますから」

それに、わたしの場合は暴走しやすいため、デバイスで制御しないと大参事になってしてしまいますし。

アーティファクトタイプは他の属性と違い魔力そのモノを操作します。

それを操作して物語を再現するのが^{アーティファクト}人造遺物タイプといえます。わたしの場合は不思議の国のアリスを現代に再現しています。これでもアーティファクトタイプの中では中堅といった所になりますが、上位の人たちは聖書や神代の物語を再現する化物達です。

今使用した王様の特権は回復系の魔法で、体内の毒素や体の傷などを治療できます。

対象に接触していないと効果を發揮できませんので、意外と使い勝手の悪い魔法ですね。

「はああ、生き返る」

先ほどとは違う理由で机に突っ伏すわたし。

ああ、しあわせ。

「制約やら何やらがあっても、それだけ使えるなら便利と言って差し支えないと思うけどね。私なんて暗くするだけよ？」

「闇だって使い様ですよ。同じようにセシルの水だって色々と使えるじゃないですか。隣の芝は青く見えるモノですから」

「アリスさんは前向きですね」

使い終わったデバイスを先生にバレないうちにさっさと片付けてしましましょう。

デバイスの使用は禁止されている訳ではありませんが、流石に二日……いえ、もう認めましょう。二日酔いを治すために魔法を使いましたなんて、絶対に言えません。

そんな事を言ってしまった日には……いえ、口に出す前に殺されそうですね。

ガラガラ

「うえーい、全員席に付け」

おお、噂をすれば何とやら、別に口にしてはいませんが日向先生のご到着です。でも日向先生なら心の声ぐらい簡単に聞いていそ

うですが。

「今日は異界探索がぁ……………うつ……………すまんちよつと失礼」

ガラガラガラ

先生は体調が悪いようですね。何かいい事でもあったんでしょうか？

数分後。

ガラガラ

「すまん、少し二日酔いで……………アリス、後で話がある」

「何故！？ わたし今日はまだ何もしていませんよ！」

「黙れ、頭に響く……………」

なぜでしょう……………神よ、なぜ我を見捨てたもう。

「あぁ、今日は異界探索だ。いくら下位世界に行くとっても危険は多い、全員気を引き締めて……………うつ……………せめて、奴のクラスには……………負けるな……………」

ガラッ！！

日向先生はそれだけ言い残して、戦場^{トイレ}へと走って行きました。

その後、日向先生を見た生徒は――

まあ、わたしなんですが。

14 二日、もとい体調不良について（後書き）

作「ア、アリスさん？」

ア「今二日酔いなんです。話しかけないでください」

作「いやいや、そんな時こそ魔法でしょう」

ア「そんな都合のいい物現実には存在しません」

作「アンタ作品全否定かよ！」

ア「この作品はフィクションです！ 過去現在未来全世界には関係ありません！！」

作「本当に全力で全否定だな！」

ア「あ、すいません。そろそろ限界なん————」

ガラッ

ダダダダダッダダダダダ

15 異世界の危険について

「『アリス』限定解除、王様の特権。^{キング}日向先生、これでいいですか？」

「ああ、アリス、助かった」

今わたしは呼び出されて——自分でトイレに向かったのですが——日向先生の治療を行っています。

「ああ、生き返る」

あれ、何故でしょう。なんかデジャブを感じますよ
気のせいですね。

「日向先生、これから異界探索なんですから。しっかりしてください」

「アリス、お前学年主任みたいだな。今度あのハゲと代わってやれよ」

「いやですよ。わたしはハゲたくないですから」

「お前は本当にいい性格しているよな」

「あはは、日向先生、そんなに褒めないでください、照れます」

「いや、褒めては……あー、まあ、いいか。さっさと魔練場に行けよ？ 遅刻したら置いて行くからね」

そう言って、日向先生はトイレを後にしました。
セリフの割にカッコ悪いです。

その後、魔練場へと出向いたわたしに、

「遅いぞ、遅刻だ！」

日向先生の怒鳴り声が待っていました。

なんでしよう。この理不尽な感じは……………

これは復讐を考えても良いかもしれません。

まずは全裸でしょうか。次はバニーガール、ナースも良いですね。巫女さん、獣耳、スク水は狙い過ぎでしょうか？ まあ、何を身に着たとしても、中身が三十路先生では痛いだけでしょうけれど。

「これから異界探索についての諸注意を行う。アリス、さっさと列に入れ」

わたしの黒い波動に気が付いたのでしょうか、日向先生はそれ以上の注意をせず、異界探索についての説明を始めてしまいました。

日向先生、貞操を守りましたね。まったく、惜しい事をしました。主にわたしが。

「これから向かうのはこの世界よりも下位の世界とは言え、危険は多い。」

異世界が危険なのは当たり前ですね。時にはこの世界での常識は、異世界での非常識になる可能性があります。

林檎が上に向かって落ちて行き、蛇口からは砂がでる。そんな事が常識である世界に向かうのです。危険でない筈がありません。

「下位世界へ向かう場合、特に注意する事は……そうだな、アリス、答えてみろ」

「下位世界で最も気を付けなければならない事は、怪我や病気です」
「その通りだ」

当たり前の事だと侮るなれです。下位世界の物質や法則ではわたしたち上位世界の人間は、傷つける事も癒やす事も難しいのです。当然、そこで怪我をすれば、治す術は自身の技術以外になく、病気になるれば、それを治すためには自身で持ち込んだ物資以外に頼れるものではありません。

その世界独特の病気や感染症の危険は計り知れない物があります。要するに、切り傷や風邪で死ぬ可能性があるという事です。

回復魔法が使えるわたしには関係が無いことでもありますけれど。魔法が使えない状態もありえますしね。

「これから異世界に行くにあたって簡易武装を許可するが、間違っても人に向けない様に。後は、これから行く世界には知的生命体はいない筈だが、異世界の中には、この世界の様に世界を渡る技術を持っている世界もある。間違って傷つけたり、殺したりしないように」

まあ、当然ですよね。

「アリスと鷹津は冒険者だ。分からない事があったら聞け。二人もアドバイスぐらいしてやれよ」

任せて下さい！ わたしはこれでもプロフェッショナル。プロなんです！

「それと、今回向かう異世界は下位世界とは言えこことそれほどラ
ンクは変わらない。軽い肉体強化と、魔法効果が強くなる以外には
所謂チートは発動しない。それを踏まえて準備をしておけよ。では、
30分後に出発だ。各自準備を怠るなよ」

日向先生の号令と共に、周囲がざわつき始めます。

15 異世界の危険について（後書き）

ア『本日は休ませてもらいます』

作「あれ？ 今日にはアリアさん居ないのか。ならゲストは——」

日「何故私の出番はこんなに短いんだ！」

作「二日酔いで唸っている様な日向先生の出番なんてこんなもんですよ」

日「出番が………欲しいです」

作「諦めれば、いいんじゃないかな？」

日「諦められるか!!」

16 準備について

「アリス！ こっちこっち」

声の主を探すと、サナがこちらに向かって手を振っていました。セシルはその横で眠そうに立っています。

「サナとセシル、武器はどうします？ 学園からの貸し出しで良さそうな物があるか探しに行きませんか」

「うーん……私は槍か棒があれば嬉しいんだけど」

「私は弓ですかね」

なるほど、サナが槍でセシルは弓ですか。まあ、それくらいなら学園側も準備しているでしょう。

わたしの武装は自前のナイフが数十本とハンドガン2丁で問題ないでしょう。弾は貸し出されている学園認可の物になるでしょうが、それでも安全が確保されている異世界に行くには十分すぎる装備です。

「さっさと行きませんか、また日向先生に怒られてしまいます」

「アハハ、またって、怒られているのは何時もアリスだけなんだけどね」

「サナ、それは言わない約束ですよ」

「アリスさん、何時も迷惑かけますね」

わたしたち3人は、談笑しつつも武器庫に向かいます。

そこには、メジャーなモノで銃や剣、マニアックなモノで三節棍

や日本刀など様々のモノが置いてあります。

わたしたちはデバイスを用いて魔法を使う事は出来ますが、別に魔法至上主義という訳ではありません。

元々、魔法なんてものは補助以上に意味はないと言っても良いでしょう。

魔法を放つ為にデバイスを機動、魔力を籠め、目標に向かって放つ。これだけの動作を行うくらいなら、銃の引き金を引いた方が手っ取り早く、簡単ですからね。

あくまでも魔法は補助、絶対のモノでは無いという意識は大切です。

もちろん、現代の銃火器で対応できない異世界の生物も存在しています。それらに対して魔法は有効ではありますが、これから行く異世界にはそこまで強力なモノは存在していないでしょうし、魔法の出番は先生の評価ぐらいでしょうか。

「お、この槍は使いやすそうね。アリス、何本ぐらい持っていけばいいと思う？」

「サナの腕なら予備を含めても2本あれば十分じゃないですか？」

「弓は120本ぐらいを小分けに圧縮していけばいいですかね？」

「セシル、それだけ持って行くくらいなら銃の一つでも持って行って下さい。まだ扱えないんですか？」

「銃は苦手なんです」

セシルは銃よりも弓を好んで使用しています。弓に魔法を乗せて放ちますから、そこの銃よりも威力が高くなっているので問題無いと言えば問題無いのですが。やはりここは、流石エルフと言った方がいいのでしょうか。

「武器を選んだら整備はしっかりとしておいてください。学園側が

整備を怠っている事はないとは思いますが、用心しておくにこした事はありません」

武器が壊れたので死にましたとか、笑い話にもなりませんからね。二人の武器が選び終わりましたので、わたしも自分の武器の整備でもしましょうか。

ナイフと銃を全て取り出し、ヒビや動作不良が無いか一つ一つ確認していきます。

「いつも思うのだけど、その質量は何処に入っているのよ」

「カヨワイ乙女には秘密がいっぱいなんですよ」

「乙女？」

「せめてカヨワイに突っ込みをください」

ネタバレしますと、ナイフやら何やらはスカートの裏や太もも、腰、服の裏等いたるところに装備されています。要するに収納の仕方が巧いだけで、なんら不思議な事はありませんよ。ホントホント。

一通りの点検と整備を終わらせて、学園公認の衝撃弾を3カートンほど購入（タダでは無ありません）しておきます。マジックブレット

この衝撃弾は簡易デバイスの様な物で、単一の魔法しか発揮されませんが、使い勝手はとってもいいです。

この場合でいえば、衝撃弾にあらかじめ魔力を注ぎ込んでおきます。魔力を注ぎ込んでおいた衝撃弾は、打ち出される衝撃で魔法が発動され、着弾と同時に対象の意識を奪います。他にも対象を氷付けにする氷結弾、対象を燃やしつくす火炎弾などなど、種類は様々で威力や効果によって値段も様々と言ったところでしょうか。コールドブレット
ファイヤーブレット

使い捨てになってしまったため、少し御財布に厳しいのが難点なのですが。

わたしの準備は早々に終わってしまったため、周囲にアドバイスなどしつつ暇を潰していると、日向先生の号令が聞こえてきました。

「準備は出来たか!? 出来ていない者は早急に済ませろ! 後10分で出発する」

その号令と共に、周囲は慌ただしく―― 一部の例外を除いて―― になります。

8割はこの授業が初異界探索の人たちでしょう。残り2割の人たちは周りの喧騒なんてどこ吹く風で、談笑なんぞをしています。

「サナとセシルは慌てふためいたりしないんですね」

「私達は異世界の人ですからね」

「言うなれば此処に居る事自体が、異世界探索の様な物ですからね」

ああ! 言われてみればその通りですね。

そうこうしているうちに時間が来たようです。

「準備は出来た様だな。では、出発する」

日向先生の号令のもと、静寂の中に喧騒を残しつつ、異界への扉^{ゲート}を開きます。

16 準備について（後書き）

作「魔法え……」

ア「魔法って使ってもっとド派手に書いてくれるのかと思えば……」

日「当たり前だろ」

作「日向先生！」

日「魔法なんて非科学的な物に頼るより鉛玉一発ぶち込んだ方が早い」

作「まあ、実際この作品では魔法はあくまで発展途上にあって、まだ純科学の方が効率的ですからね」

ア「魔法もつと使いましょうよ！ 夢と希望を力に変えてカチ込みましょう！」

作「夢と希望を論ずる間に鉛玉なら数百万単位でぶち込めますよ」

ア「夢も希望もここには無いのか！」

17 班員について

ゲート
フラッグ
転移門には二種類ありまして。世港ターミナルと呼ばれる固定型の施設と、旗と呼ばれる魔力供給型のモノです。

ターミナルは、移動先が複数設定されていて、その中から選択さえすれば、魔力の調整や転移先の固定などの必要がありません。逆に、フラッグは転移先の目標としては使えますが、魔力が貯蔵されているだけで、魔力の調整や転移先の固定などの細かい作業が必要になってきます。

今回使用するのは、学園側はターミナル、転移先はフラッグになっていますので、戻ってくる際に、魔力の調整や転移先の固定なんかを採点するでしょう。

下手な事をしない限りは胴体バラバラなんて事も無いように、何かしらの安全策でも取ってあるでしょうし。

ゲートを潜ると、そこは異世界でした。

別に異世界トリップ物ではありませんよ。これは常識です。

転移した先は森の中と言っていいのでしょうか？

疑問形にしたのには訳があります。1本の木の高さが50mは超えているって、どうなんでしょうね。高過ぎて認識できませんでしたよ。

足もとに散らばっている枝や葉、少し涼しく感じる気温や木漏れ日が無いような冬でしたら、森の中だって分かりませんよ。

この世界に冬があれば、ですけどね。

「全員居るか？ 事前に配っておいたプリントに班員が記載されていたはずだ！ それぞれの班でメンバーが揃っているか確認しろ！」

わたしの班は……………

ああ、あそこですね、わたしの方を向いて手を振っています。班のメンバーなんて気にしていなかったので助かりました。

「アリスがいれば死ぬ事はないから安心だな」

メンバーが揃うと同時に——わたしが最後の一人でした——
開口一番そんな事を言われました。

「人間死ぬ時には死にますよ」

「おっと、恐い事は言わない約束だぜ」

佐藤（仮）さんの期待には応えられなくてすいませんが、わたし一人が頑張ったところで、助かる命なんてものは、たかが知れているんです。全員で生き残る努力をしていれば、生き残る人は生き残ります。

流石に全員助かるなんて事はないでしょうけれど……………

「とりあえず自己紹介でもするか。全員知っているとは思いますが、俺さいとうたかしは斉藤正。この班の班長を任されている」

一文字違いましたか。おお、何というニアピンなんでしょうか。わたしたちの班は6人で、班長は斉藤さん、目的はこの付近に自生している薬草の採取と、簡単な戦闘訓練となっています。

採取や戦闘なんてわたしにとっては今さらなのですが、訓練だと思えば気も緩むと言ったところでしよう。

ああ、緩めてはダメですね、胸がきつくならない程度に引き締めて行きませんと。

でも、胸なんてどうせ……

「班での話し合いが終わったところから行動を開始しろ！ 時間は余分にとってある、焦らずに安全優先でな、では解散！」

若干暗い気持ちになりつつ、行動を開始する事にしましょう。

「よし、俺たちも、ってどうしたアリス、いきなりテンションが低いぞ」

斎藤さん、わたしの事は放って置いて下さい。どうせ、どうせ私なんて……

「まずは薬草でも探すか。二人一組で周辺を散策、何かあった場合はすぐに連絡できるようにしておけよ」

薬草はその辺りに自生している物ですが、似た様な物で強い毒性を持った物も自生しているはずです。それにさえ気を付けておけば問題無いでしょう。

「何も無くても30分後には此処に集合。目標を発見した場合は、連絡を廻して此処に集合だ。よし、行くぞ。アリス」

ああ、わたしは斎藤さんとのチームですか。

文句はありませんが、わたしが一番の問題児扱いされているよう

で、何か釈然としないモノがありますね。

17 班員について(後書き)

作「申し訳ない……」

ア「土下座するべきです」

作「いや、ちょっとした勘違いって誰でも」

ア「言い訳しないでください」

作「申し訳ない」(Orz)

ア「この度は、アホ作者が次話投稿日を勘違いしていたせいで」

作「いや、作者的には29日に投稿すれば問題無いっていう何処から来たのか分からない自信に充ち溢れていたのに！」

ア「で、投稿しようと前話を確認したところ？」

作「次話投稿は3日以内にしようと思っていた決意が粉々に……」

ア「アホですね」

作「大変申し訳ない」

18 薬草について

「目的の薬草は乾燥を嫌うんだよね？」

「そうですね。今回の目的は薬草と毒草を見極めるだけですから、ジメジメしている所を探していれば問題無いでしょう」

今回の薬草と似ている毒草というのは、乾燥した場所に自生しています。薬草自体は湿気の多い場所にしか自生していないので、間違い以前に生えている環境で識別できるはずです。

「あの辺りなんて生えてそうじゃないか？」

「ああ、あそこなら一本や二本生えていそうですね。用心の為に皮の手袋は着用しておいた方がいいですね。持参していますか？」

「おう、一応で持ってきておいたんだが、正解だったな」

毒草の中には、触っただけでアウトな物もありますからね。学校の実習で使われる場所ですから無いとは思いますが、用心しておくに越した事は無いでしょう。

皮手袋を装備したわたしと斎藤は、薬草のありそうな場所の散策を始めます。

ガサガサ、ごそごそ。ピロン。カラの実を手に入れた。

ガサガサ、ごそごそ。ピロン。薬草を手に入れた。

ガサガサ、ごそごそ。カコン。もう何も無いようだ。

ああ、ありました、ありました。

これが目的の薬草でしょう。意外と簡単に発見できましたね。

わたしはナイフ使いですから薬草以外は必要ないですね、捨ててしましましょう。

「斉藤さん。目的のブツはてにいれました」

「そうか、金は此処に在る。確認してくれ」

「お主も悪よの」

「いえいえ、お代官様ほどでは」

「バカやってないでさっさと行きますか」

「そうだな」

斉藤さんも乗りが良いですね。なんか楽しくなってきましたよ。

「割と簡単に見つかりましたけど、他のメンバーも見つけてるでしょうか」

「これだけ簡単に見つけられたのは運が良かったただけだろ。他の奴らに連絡廻して、戦闘実習やれば、今回の実習の目的は完遂だな」

「そうですね、ではわたしは2人に連絡しますから、もう二人への連絡は任せます」

「ああ、もう連絡は回したから大丈夫だ」

おお！ 流石は班長です。仕事が早いですね。

「わたし戦闘訓練は後方支援だけになると思いますんで、頑張っ

くださいね」

「アリスが主戦力だと思って楽が出来る作戦考えてたんだが、残念だ」

「それは御愁傷さまです」

わたしが前衛に回った場合、それは連携云々の意味がありませんからね。実習前に日向先生から釘を刺されているんですよ。戦闘に参加するなど、参加してもせめて後方支援だけにしろと。

集合場所に戻ると、既に全員揃っていた様です。

「俺たちが最後みたいだな、連絡の時にも聞いたが、薬草を手に入れたのは俺たちだけか？」

「戻って来る時に1つ見つけたわ」

「オレ達は収穫ゼロや」

という事は合計で2つでしょうか。班で2つ見つければノルマはクリアですので、これで問題は無いでしょう。

多めに取って来て他の班に売捌いてやろうとか考えても居たのですが、残念です。

「日向先生に報告すれば、後は戦闘実習だけだ。さっさと終わらせて自由時間を満喫するぞ！」

「「「おー！」「」」

動機は不純でも、みんなで一致団結するのは気持ちがいいですね。

わたしは自由時間にご主人さまが使用する素材マスターの採取を行うつもりだったので、これはとても都合がいいです。

18 薬草について（後書き）

作「今さらだけど斉藤についてご紹介しますよ」

斉藤（以下斉）「やっと俺の出番だな！」

作「そこで残念なお知らせ、実は斉藤について語る事がありません」

斉「なんでだよ！」

作「思いつきで出したキャラだけど意外と使い勝手がいい事が判明。そのまま使ってるだけですから」

斉「俺のプロフィールは！？」

作「男のプロフィールとかこれで充分だろ」

名前 さいとう 斉藤正 ただし

キャラ 不憫な子

容姿 典型的なリア充を思い浮かべて下さい
性能 突っ込み放題かませキャラ

斉「斬新過ぎるプロフィール！！」

19 まさかの展開について

「アリスはこれが終わったら何して暇潰すんだ？」

「わたしですか？」

採取が終ったことを報告しようと、日向先生を探し始めたのですが。肝心の先生は何処かの班のヘルプ、もしくは戦闘実習の採点にいつてしまったらしく、現在絶賛行方不明です。生死不明と言っても過言ではありませんよ。

15分ほど周辺を探し回ったのですが、日向先生が結局発見できなかったため、集合場所であるはずの少し開けた場所で全員が待ち惚け状態です。

そこには、わたしたち以外にも採取が終ったのであろう班が、続々と集まりだしています。

わたしたちがここで休憩を始めてから、早20分が経とうとしています。

「ここまで時間が経ってしまったては、暇な時間も殆ど残らないと思いますよ？」

斉藤さんの質問に軽く応えて、これからの予定とそれに掛かる時間を脳内で計算してみますと、やはり、暇な時間は残らないという答えに辿り着いてしまいます。

「いやいや、それでも15分くらいなら余裕あるはずだぜ」

「ええ、でも15分では何をしようにも中途半端すぎるんですよ」

マスターへのお土産探しを行おうと思ってはいたのですが、流石に時間が無いから諦めるしかないですね。

「つてことは暇って事だろ？」

「言ってしまうばそうですね」

斉藤さんは何が言いたいんでしょう？

まさかわたしの散策を手伝ってくれるんでしょうか！？

確かに二人で散策が行えるなら、単純計算で1人で行う散策の2倍の範囲を散策する事が出来ますが、斉藤さんは素人の筈です。

素人判断で持ち込まれた薬草には毒草が混じっているかもしれないません。それを判別する作業をわたし1人で行った場合、結局帰って帰れるのは1人で散策を行った場合とそれほど違いがあるとも思えませんね。

むしろ判別作業が無い分、1人で行ったほうが楽な気がします。

「暇な時間が出来たら俺と付き合ってくれ！」

「……………」

「…え？」

「いいのか？ ダメか！？」

「いえ、わたくしは未だ誰とも結婚を前提にお付き合いする気は無く——」

「え？ いや何言って……………いや、違う！！ そういう意味じゃなくてちよつと時間が余ったら俺と2人でこの辺を散歩しないかって、いやこれも無し！ 今の無し！！」

何でしょう？ わたしは告白されたのでしょうか？

斉藤さん———今日始めて名前を覚えたのですが、下の名前は未

だ……知りません——はわたしとデートをして、『イチャラブ』したいという事なのでしょうか？

しかし、この慌て様では確認も出来ませんね。

「斉藤さん深呼吸です！ 吸って！！」

「スー」

「吸って！」

「スー、スー」

「胃の中身をぶちまけて！」

「ゲロゲロゲロって、出来るか！」

「意外と出てきませんでしたね、手伝いましょうか？」

「胃の中身をぶちまける気は無い！」

「本音はぶちまけたのに？」

「いや、だから、それは。その………そんなことはどうでもいいんだ！ OKなのか！？ YESかハイで頼む！」

それは肯定しか許されていないではないですか。

しかし、ここは正直に答えるしか選択肢はありませんね。

「来世ではお友達になりましょう」

「振られた………しかも来世でもお友達………いや待て！
じゃあ今はお友達以下って事か！？」

「何を言っているんですか、わたしたちは親友でしょう？」

「来世ではお友達に格下げって事か！？ いや待て、お前俺のフルネーム言ってみろ」

おっと、これは予想外の反撃です。

しかし、このわたしに死角はありません。

「三番隊組長、斉藤一！」

「俺に牙突の才能は無いってか、俺最初に自己紹介したよな!!」
「そんなことありませんよ、佐藤さんの名前はしっかり覚えてますよ!」

「既に苗字から変わってるぞ」

「佐川○便さんですよ。ほらしっかりと」

「俺の名前を何処まで届ける気だ」

「わたしクロ○コのばかり利用しているんで、すぐには思い出せなかったといえますか」

「いや違うからな! 俺の名前はそこまで有名じゃないからな!？」

「何が不服なんですか、五月雨さん」

「既に『さ』意外に原型が無い」

五月雨さんがまさに五月の天気のように項垂れています。何か不運な事でもあったんでしょうか。

それにしても暇すぎますね。今のうちに少し寝ておきましょう。日向先生が居ないのがいけないんです。決して睡魔に負けそうなのわたしの所為ではありません。

「眠くなったので少し寝させてもらいます。日向先生が来たら起こして下さいネ。佐藤悟飯さん」

「それは俺の事か? 俺はレンジで温めても美味しく炊けないし、月を見ても大きくはならないからな!？ っってもう寝てるし!!」

睡魔に敗れたわたしに対してのその突っ込みは、右耳から入り脳を素通りして、左耳へと抜けて行きました。

19 まさかの展開について（後書き）

作「アリスさんが告白されたようです！ 現場のアリスさん」

ア「こちら現場のアリスです」

作「そちらの状況はどうですか」

ア「現在情報が錯綜していま——あっ！ あそこに居るのは件の五月雨さんでは無いでしょうか！？」

斉「！？ ！？ え？ 俺！？」

作「早速インタビューの方を！」

ア「五月雨さん！ 現在の心境を！」

斉「えっと、その、いい返事がもらえると嬉し……ってなんだよこの羞恥プレイは！！！」

作「え？ 羞恥プレイだろ？ それ以外に何に見えるんだよ」

ア「公開処刑ですね☆」

斉「絶対OK貰ってやるからな！ まだ諦めて無いんだからな！！！」

ア「しつこい男は嫌われますよ。もう嫌ってますけど」

作「不憫な……」

齊「お前が言うな!!」

20 フラグ回収について

「――ス！」

ああ、五月蠅いですね。もう五年ほど寝させてください。

「お――！！　ア――ス――――ろ！！！」

「あと5ねんまってください」

「長過ぎだろ！！！」

「アイタッ！！！」

鮮明な突っ込みと鮮烈な突っ込みの両方を受け、わたしの意識は地獄の底から天国に昇る魂の様に覚醒しました。

「なんですか？　あ、そう言えば日向先生見つけました？」

「起きろ！　緊急事態だ！！！」

「――ッ！」

緊急事態の一言で、まだ寝ぼけていた頭が完全にハッキリと覚醒しましたよ。

「何があったんですか」

「この世界が急に並行世界に昇格したらしい」

「……………は！？？」

世界の昇格事態は珍しい事態ではありません。

法則の発見、理性の発展、技術の進歩、生物の進化。それ以外にも異世界との交流や振興によって確認されているだけで1日に何十の異世界が昇格降格を繰り返しています。

しかし、ここは学園が実習の場として使用している異世界であり、緻密な計算や正確無比な調査によって、変動が少ないと判断された異世界である筈です。まして実習中に変動するなんて事は、限りなくゼロに近いと言ってもいいでしょう。

考えられる要因としては、大規模な異世界からの侵略でしょうか。それにしても昇格が早すぎる気がします。つと、これ以上ここで考察を続けたところで意味はありませんね。

「斎藤さん、日向先生の居場所は分かりますか？ それいと現状について詳しく説明して下さい」

「数分前いきなり狼らしき動物の群れに襲われたんだ、最初は俺達だけでも対処できると思っていたんだが量が多くて、今日向先生を探しに行かせたんだがそれも何時見つかるか分からないし狼たちの量は増え続けてるし、どう頑張っても俺たちだけじゃ対処できないと思うんだ、鷹津も防衛線には参加してもらっているけど鷹津が言うには保護対象の狼らしくてこのままじゃジリ貧らしい、俺は鷹津にアリスを呼んで来いと頼まれて――」

「長いです。3行でまとめて下さい」

「狼に襲われた。」

日向先生は生死不明。

アリス助けて」

「把握しました」

「自分で言っただけだが、アレで把握できるもんなのか!？」

「ぶっちゃけて言えば日向先生が役に立たない三十路だったという

ことでしょう」

「そんな事は一言も言って無い！」

おかしいですね？ どう聞いてもそうとしか判断できないんです
が。

「斉藤さん、こんな漫才をやっている暇があったらさっさと案内して
ください！」

「え、俺の所為か！？」

「いいから早くしてください」

「お、おう。こっちだ」

斎藤に案内された先では、数十人の生徒が4人一組になって防衛
戦を行っていました。

防衛戦を行っている場所は崖と木々と、岩などによって狭い道と
なっているため、回り込まれる心配がないこちら側としては防衛し
やすい地形と言えるでしょう。

中でも、鷹津くんは指揮を飛ばしながら戦闘を行っていたので、
とても目立っていますね。たぶんですが、ここで防衛線を張る様に
指示したのも、鷹津くんなのでは無いでしょうか。

「そっちに2匹行ったぞ！ 3班と5班はフォロー！」

「鷹津くん、現状について簡単に説明して下さい」

わたしは鷹津くんの傍へと向かい、現状について尋ねます。

「この世界の殺傷不可対象がいきなり襲ってきたんだ。最初は数匹だったんだが現状はこの有様だ。地球に戻ろうにも転移をこの状況で発動できる奴がない。失敗してここより酷い所に転移されても助けられないからな、さっさと日向先生見つけて来い！」

「わたしか鷹津くんが」

「俺だってギリギリなんだ、この状況で転移なんて出来るか！ 後、神狼らしき奴もいた。こっちは攻撃できないからこのままじゃジリ貧だ。分ったらさっさと手伝え！」

殺傷不可対象と言うのは、読んで字の如く攻撃できない生物や植物の事を指しています。ある程度の知性、もしくは希少価値を持つ対象がそれに当てはまりますが、今回の場合は真白い毛皮を持つ狼らしき生物の事です。その親が神狼らしき、いえ、これだけの狼が統率のとれた動きを見せているのです。神狼と名付けても問題無いでしょう。

事実、狼たちは統率のとれた軍隊の様に、学生たちに波状攻撃を仕掛けています。狼は群れで生活しているとは言っても、ここまで戦略性のある戦闘を、行う事は無いでしょうし。

あ、今負傷した一匹を引き摺って撤退した奴がいましたね。

……。

「今納得しかけたけど、絶対におかしいでしょう！」

「だから言ってるだろ！ さっさと手伝うか、日向の三十路を此処に引き摺って来い！！」

叫びながらも、鷹津くんはこちらへ突進してきた一匹に対して、

障壁を張って叩き返します。

「殺傷不可対象が相手じゃこれ位が限界だ。これじゃ後数分も持たないぞ！」

「そもそも殺傷不可に対してこんな戦闘行為していいんですか？」

「正当防衛だ！！」

言い切りましたね。ならこれの責任は、全て日向先生に負って貰いましょう。

そう！ 全ては日向先生がやった事です。わたしたちは何も知りません。

「わたしが防衛線を一時的にですが支えます。その間に負傷者を後ろに下げて、出来れば転移して下さい」

「できるのか？」

「全員下ってください！！ 『アリス』 限定解除、 『使い捨ての数^ブ字[」]」

鷹津くんの疑問に対し、わたしは行動で応える事にしましょう。木々と岩の間に7枚の楯が展開され、狼たちの進行を完全に阻むことに成功しました。

数匹の狼が楯のこちら側に取り残されたようですが、クラスの人たちによって強制的に意識を刈り取られ、動かなくなっていきます。

「10分は持たせます。その間にどうかして下さい」

「全員旗^{フラッグ}まで走れ！ 俺が転移^{ゲート}門を開く！」

その声にクラスメイト達が我先にと走りだしました。

「アリス！ 私達も手伝うわよ！」

「何か出来る事はありませんか？」

サナにセシル、とてもありがたい言葉なのですが、

「ありません、早く逃げて下さい」

わたしの口から放たれた冷たい言葉に、二人の表情が強張ります。しかし、ここは心を鬼にしてでも二人の安全を考えなければなりません。

「早く行ってください。わたしでも結構きついんですよ。『使^トい捨^{ラシブ}ての数字』！！」

楯の上を飛び越えようとした一匹に対して、新たに一枚の楯を展開し、撃退します。

狼はそのままの勢いで楯にぶつかり、『キャウン』という可愛い鳴き声と共に元居た地面へと落ちて行きました。

「帰ったらラピスラズリのケーキ奢って貰うからね！」

「私はドリンクで」

「ハイハイ、では、わたしは二人の笑顔を貰いましょう」

「約束したからね！ 絶対だからね！」

「サナさん、それは世に言うフラグと言う物ですよ」

「べ、別に立てたくて立てた訳じゃないんだからね！」

「アリスさんはツンデレですね」

「何処から突っ込めばいいのか分からないわ！」

サナとセシルの二人が居れば、どんな所でも笑えるんですね。もう、何も感じない3年前のわたしとは違います。

だから、

「二人とも、学園で待っていてください。わたしは少し遅れます」

二人だけは絶対に、いえ、クラスメイトぐらいは、わたしの命に代えても守りましょう。

「ハイハイ、遅刻しない程度に遅れてきなさい」

「遅刻すると日向先生怖いですからね」

二人はそれだけ言い残し、ゲートの方へと走って行きました。

20 フラグ回収について（後書き）

ア「予想通りの展開ですね」

作「どうせテンプレだよ」

ア「せめて王道って言いましょうよ」

作「作品の話は置いといて」

ア「作者さんはお引越しです！」

作「作品をお引越しでは無くリアルで引越します」

ア「8月はコミケもありますからね」

作「ただでさえ亀更新なのに……」

ア「書きたい時に書くのが一番ですよ」

21 良くある展開について

「しかし、此処も時間の問題ですかね」

楯が楯として機能するのは後5分程度が限界でしょうし、背後からの奇襲にも気を抜けません。

「一番ネックなのは、相手が殺傷不可対象だということでしょうか……」

敵を殲滅する方がわたし的には――

「7班班長、斉藤正！」

……………。

「……………」

……………。

「此処が落ちるのも時間の問題ですね。一番ネックなのは殺傷不可と言ったと」

「無視してやり直さないでくださいお願いします!!」

……………。

「味方を殲滅する方がわたし的には――」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!」

「何でまだ残っているんですか、五月雨!」

「俺今名乗ったよな!？」

振り向くと、そこには逃げたはずの五月雨が居ました。

「五月雨は早く逃げて下さい! 五月雨がここに居るとわたしが逃げられないでしょう。『使い捨ての数字』^{トランプ}」

会話をしながらも戦闘に気は抜けません。

今も上から来ようとした数匹に対して、楯を新たに3枚展開して迎撃を図ります。

流石にここまで『使い捨ての数字』^{トランプ}の枚数を増やすのは久しぶりです。

最初は7枚だった『使い捨ての数字』^{トランプ}は、今は17枚まで増えています。

「好きな女置いて逃げられる訳ないだろ!」

「そのセリフは護る立場になってから言ってください! っと言うかさっさと星に帰れ斉藤正!!」

「このタイミングでフルネーム呼ばれるとか嫌われてるとしか思えないんだが」

「大嫌いですからさっさと星に帰って下さい、お願いします。この短小○莖早○さん」

「その単語は女子から聞きたくなかった!」

「安心して下さい。帰ってから男子にも噂を広めておきますから」
「アリスって俺にだけ冷たくない!？」

そんな事はありません。誰にでも平等がわたしのモットーですから。

「いいからさっさと帰って下さい！　ここだって後2分も持ちません。わたしは撤退しながらでも応戦できますが、斉藤さんを護りながら、殺さない自信がありません」

「俺だって自分の身くらい自分で守れる」

「いえ、貴方を殺さない自信がありません！」

「俺が殺され」

ガァァァン！！

大きな音とともに、わたしの楯にとてつもない負荷が加わりました。

「グルルるるルルルるるるル」

楯の向こう側に、今までの狼とは明らかに格の違う——というよりも、種族が違うとしか思えないような大きさの白銀の狼と漆黒の狼が居ました。

「神……………狼……………？」

その呟きは、どちらの口から洩れたモノだったのでしょうか。

しかし、その言葉は、二人の脳には理解し難いモノではありませんでした。むしろ理解したくはないです。

「斉藤、早くさが」

ってください。という言葉は、わたしの口から放たれる事はありません。

ませんでした。

ズバン！！

「楯が！？」

わたしの『使い捨^{トランプ}ての数字』の一枚が、白銀の狼の前足一振りによって紙の様に切り捨てられました。

「——ッッ！！ 『使い捨^{トランプ}ての数字』！！」

わたしはすぐさま楯を張り直しました。しかし、ぐるううるうつつううるううう

白銀の狼の横で漆黒の狼が魔力を練り上げ、魔法を放とうとしていました。

「斉藤！　すぐにわたしの後ろに、『使い捨^{トランプ}ての数字』！！」

それまで谷間に満遍無く張っていた楯を解除し、5枚を自分の前にだけ縦並びに貼り直します。

——ッッッパッ！！

音にするとこんな感じでしょうか。

それは音も無く、ただ光の奔流が漆黒の狼の口から、わたしたちに向かって放たれました。

————ッッッ！！

網膜が焼き付く様な光の奔流が過ぎ去ったのは、一瞬の事だったのか、それとも数分続いたのでしょうか。どちらにしても、わたしには永遠の様に感じたのは仕方がないことでしょう。

「わたしたち、生きていますよね。まだ死んでないですよね」

「目の前に狼の群れが居るから死んでないと思うぞ」

楯を5枚に減らし、その分魔力を込めたのですが、それが今や残り2枚とは、流石に生きた心地がしませんね。

どっちにしろ今の状況は、地獄と大して変わらないかもしれないかもしれませんが。

「斉藤逃げますよ」

「お、おう」

「『アリス』限定解除」

白と黒の神はその瞳を逸らさずに、わたしたちを睨みつけています。

「行きますよ『^{マーチヘアー}発狂兔』！」

唱えると同時に、わたしは斎藤を抱えるようにして肩に担ぎ、狼の群れからゲートへ向かい全速で走り始めます。

「これなんか違わね!？」

「文句は後で聞きます! 鈍足は黙って担がれていてください!」

「……………すまん」

肉体強化無しで狼たちから逃げるのは不可能に近いことでしょう。

それこそ愚の骨の頂に、真新しい屍を曝すに等しい行為と言っても過言ではありません。

狼たちは一瞬呆けた様な仕草の後、思いだしたようにその健脚を生かした速度で追って来ました。

流石に『^{マーチヘアー}発狂兎』を使用しても、文字通りの御荷物居たんでは厳しいかもしれません。

「神への供物は一人で足りるでしょうか」（ボソ）

「何か今不穏な発言が聞こえた気がする！」

「冗談に決まっているではありませんか。クラスメイトを捨てて行くなんてしませんよ。昨日食べた卵に誓ってしません」

「それが本当なら俺は卵に感謝する！」

バカやってる間に狼たちが追いついて来たようですね。

「斉藤！ 何か使える呪文はありますか？」

「俺が使えるのは複製^{コピー}だけだ！」

「何ができますか」

「何でも複製^{コピー}できる。ただそれを動かす事は出来ない、誰かが使う事は出来るが」

「ならそこら辺の木をコピーして下さい！」

「……？ ——わかった！！」

斉藤は担がれたまま擦違った木に触り、

「複製^{コピー}！」

叫びました。

追いついて来た狼たちの前に音も無く巨大な木が立ち並びます。
狼たちは木に阻まれ速度を落とす者、木にぶつかり倒れる者と様々ですが、こちらを追って来る者は少なくなりました。

「やるじゃないですか五月雨！」

「俺は斉藤だ。褒めるなら斉藤を褒めてくれ！ 複製^{コピー}」

立ちはだかる木によって、追手がさらに減りました。
これなら逃げ切れるかもしれません。

21 良くある展開について（後書き）

作「次の更新はきつと9月中旬くらいかと」

ア「伸ばし過ぎでしょう！　せめて8月に更新しなさい」

作「だって、コミケが……」

ア「コミケ中にも書けばいいでしょう。まったく」

作「手が忙しくて書けません」

ア「死ねばいいのに」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8199t/>

魔薬師の弟子

2011年7月23日12時20分発行